二、沒我寛容

家庭に於ける一貫した寛容の態度は既に前章に述べた通りであるが、社會生活に於ても亦全く同樣であつた。

清水市制の施行前後に於て、市會その他の會合は固より一切の場合に他人が隨分勝手な主張や言辭を弄しても決して意に介せず、常に寛博大度、自我を沒して他を寛容し只管人の爲社會公共の爲に圖り、苟くも自己の感情に左右された事は無い。市政上の事で反對の立場に在つた人が關係政黨の長老安達氏に何かと誹謗したところ、却て「鈴興君がそんな馬鹿な事を言ふものか」と少しも採りあげなかつたといふ話があるが、氏の誠意は知る人ぞ知るで、如何なる時でも他人に對して些の疑念を挾まず、天空海濶の度量を以て總べてを包容し、毛を吹いて疵を求めるが如きを戒め、克く人を信じ他を容れる德が高かつた。

隨分迷惑を掛けた人もあつたが、其の行爲を憎んでもその人を咎めずに深切を盡して面倒を見られた。日頃深切の限りを竭し恩惠を施しても、彼れは自分のおかげだ」といふやうなことは少しも無く、相當恩義を蒙つた人が何かの都合で反對の立場に立つても、快く談合して感情に捉はれず、寧ろ其の境遇に同情するのであつた。

「君、そんな事をしては困るでは無いか」の一言こそは最大の叱責であつて、人に憤怒の色を見せたことは殆んど稀で全く珍らしい寛容の仁であつた。富士郡の或肥料商の爲に三十萬圓も辨償を餘儀なくされたことがあつたが、到頭之れを完全に支拂ひ、而もその人の惡口一つ洩らさなかつた。

ある時店員が相手方を信用して、船荷證券無しで貨物を引き渡したのが法律問題となり、十數萬圓の損害を蒙ることになつたが、其の店員の粗忽を叱るでも無く優しく道理を以て諭され、その訴訟中に仲裁人が四分の一にも足らぬ金額を以て示談を懇請したところ、相手の現狀にも深く惻隱の情を寄せ、仲裁者の顏も立て度いといふ考へから遂に之れを快承し、訴訟費の辨償にも足りない少額に甘んじて折角第一審で勝つた訴訟を取下げ、損害を全部負擔し

て圓滿に解決されたのである。

市政實施の直後は未だ人心も平靜に至らず、稍々もすれば議論鬪爭の起り易い時であつた。或日朝陽館で議長たる氏が都市計畫委員の發表をした處、不在であつた某議員が、江尻町から一名の委員も出ないのは紛糾の種だから、既に發表後であつても何とか考へ直して呉れ、と强硬に陳述すると、その場合これは流石に難題ではあつたが、熟慮してその議を容れ、遂に一名の人選を江尻方に委せて圓滿に處理され、其の寛大な取計ひに依つて一時險惡視された市會の役員選擧も談笑裡に行ふことが出來た。

何事によらず萬事承知して居ながら、胸に治めて少しも怒らず、克己沒我克く人を包容し、社會の圓滿な發達を念として終生渝ること無く、稀に見る寛容大度の士であつた。

抑々人の心は其の面の如く同じでは無い、夫々多少の相違あるは當然ながら、長短おのづから其の間に在つて、寛博度量を以てその短を憐み、その長を認めてこそ人に感應隨順が生まれる。杞梓朽あるも良工は棄てず、又、權勢を以て壓するは易く心服せしむるは難し、と昔から言はれてゐるが、氏が多數の人にその德を景仰せられる所以のものは、蓋し沒我寛容の美點にも存すると謂ふべきである。

三、朋友に對する情誼

若い頃から格別友情に厚く、朋友の爲に圖つて眞實を傾け盡力奔走されたことは夥しいものがあつた。

嘗て某舊友がその阿兄と肥料商を營み遂に失敗に陷つた際、大いに發奮を促し不屈不撓を激勵して更に人絹工業の必要性を說き、二硫化炭素製造の企業を勸め、三條件として、先づ工場敷地として土地を得ること、次ぎは適當な技術者を探すこと、三は販賣先を研究すること、を示し、三の方は自分が心配してやるからよいと言はれた。そこで喜んだ友人は取り敢へず三保の貝島に敷地を物色すると、意外にも氏は斷然之に反對した。その理由は、自分の奬めた事業の爲にその土地の發展を沮害する樣な事があつては、多數の者に非常な

迷惑がかゝつて相濟まぬ、といふ事であつて、結局隣接有度村地域に工場建設を決定し、資金約十萬圓を出資されたが、全く友人を信用して大金を出した工場を其の後四ヶ年間少しも見に趣かず、友人の方では人を信ずる誠意に衷心から感謝すると共に、是非一度來觀される樣に切望したところ、漸く只一回だけ見に行かれたといふ事である。尙同人が實兄の辨償をする爲に銀行の取立てに會つて居る時、氏の友情に訴へると、「僕が出したと言うてはいけないが、之を持參して示談をするがよい」と早速五百圓を出して與へたので、同人は今更のやうに其の厚い情誼に感激し、爾來業務も順調に趣き、心から其の德を感謝して居るのである。

四、強い責任感

日頃强烈な責任觀念を持たれて、苟も自分の引受けた事は絕對に責任を負ふ覺悟で終始せられた。某氏が駿州銀行に勤務する際身元引受けを依賴すると、「金錢上の引受はするが身元の引受は家憲として出來ない而し」と言つて特別に保證されたが、かゝることは三十五銀行勤務の某氏と僅かに二名限りで、之れ以外には斷じて引受けなかつた。人情に厚いと同時に責任といふ點は非常に重大視されたのである。

昭和七年頃財界不況の影響で銀行の取付騷ぎが起つた際、淸水銀行も相當に動搖したが、此の時氏は預金者に對して「自分が引受ける。必ず引受けた以上斷じて皆に迷惑を掛けない」と言つて責任を明示したので、人心はおのづから平靜に歸した。

市會の後で係員から議事錄を提出すると一字一句詳細に檢閱し、不明瞭な箇所や文字の誤脫などがあれば必ず之れを指摘し、多忙の時は自宅で丁寧に補正した上返され、盲判を押す樣な無責任の取扱は更に致さなかつた。

或年富士高等女學校で縣下中等學校公民科研究協議會を開催の節、午後から講演を依賴されたところ、長い原稿を車中で吟味加筆し、忙中寸暇を利用して整理せられた眞摯な態度と、一言一句忽諸にせぬその責任感に對して、傍らに居合せた校長は深く感銘を覺えたといふ事である。小學校の卒業式等に

際しても祝辭を引受けた以上、必ず萬障を排して時間勵行で參列し、急に代理を出すやうな事はしなかつた。

自店で英文タイプライターを打つ場合、時折自身で誤謬を訂正し、又、洋行中の談話に通譯が自己の氣持を正しく傳へないのを遺憾として、時々直接外人と會話したといふ事であるが、いづれも誤りを傳へまじとする責任感の表れであると謂ふべきである。

男子の一諾金鐵の如しと言はれるが、氏が常に言行一致して責任を全うする事については關係者の深く敬服するところであつた。

五、義理と仁情

常に恩義を重んじて頗る義理堅く、何は置いても世間の義理を全うしようと心掛け、知己隣人は固より多少でも義理ある所には誠意を竭くされ、祝儀弔慰の禮も成るべく代理を避け、都合の許す限り親しく自分で之を行はれた。

世人に對して仁情殊に敦厚で、鰥寡孤獨を憐み、不遇に同情して慈愛を寄せ、貧困弱者を勞つて陰に陽に救濟援助の溫い手を伸べられる事が多く、何事も頼まれると出來る限りの面倒を見られた。

裏長屋に住んで居る貧困者を憐んで歳末の慰問をしたり、或は生業の補助を施し、又營業上失敗の憂き目を見て居る者に同情し、數千金の資を與へてその更生を計るなど、氏に依つて救はれた者は相當多數にのぼつて居る。

隨分迷惑千萬な依頼を受けても、それが人のため社會の爲になる事なら必ず引受けて深切に盡力された。或は花柳界に紛爭が起き容易に解決が出來なかつたので、遂に仲裁を懇請されると別に不快な顏も見せず「それは困つた事だ、出來ることなら何とか心配して見ませう」と言つて仲に這入り、双方の言分を聽取して諄々と關係者を說得し、圓滿に難題を解決された。

非常に人情が濃やかで料理屋の給仕から藝妓に至るまで夫々の人格を認めて徒らに酷使すること無く、常に自分關係の宴會に勞力を費やさせるといふ觀念から、長い宴席のあつた後は「今日は御苦勞でした、君達のおかげで無事に終つた、さあ一緒に御飯でも頂戴しよう」と言つて心から之を犒ひ、又毎年正

月には心ず一度、平素多勢厄介をかけるからと言つて會席へ勤める藝妓達を招じて、感謝の宴をさへ張られたといふことである。謙謹な氏は身分の低い藝者の葬儀にまで參列して弔意を表されたので、知る者皆その厚い情誼に感歎せざるは無かつた。

店員等に對する仁情の一端として某歸還兵の感激談がある。

「應召に際しては、身上に就ては勿論留守中の家族の狀態まで微に入り細に亙つて深甚の慈愛を注がれ、驛頭に於ても情愛の漲つた溫顏を以て細々と注意もし激勵も與へて呉れた。野戰で受領した芳翰は愛兒を思ふが如き纒綿たる情味と、愛國の至情とが躍如として溢れて居た。負傷の報を耳にせられると實に懇情の籠つた見舞を惠まれ、廣島に歸還すると衷心より喜ばれ、事情が許せば廣島病院まで一刻も速かに樣子を見にゆき度いといふ切々の見舞狀をいたゞき全く感涙に咽んだ。殊にその一節に、

『今まで負傷せられ內地に歸還した方々に聞けば內地に到着の時には既に懷中無一文となつて種々困却致される由、貴殿に於かれてもかゝる狀態には無之や若し萬一斯かる狀態ならば遠慮なく申越され度、尙其の他の點に於ても種々御註文下されば早速にも、云々』この有難い芳書に接し、終生忘却の出來ない感激を覺えた。そして靜岡陸軍病院へ收容されると、公私の用務で靜岡へ見える每に必ず鄭重な御見舞を戴き、何とも感激の言葉も無かつた」

洵に義理堅く人情の厚いのには、誰でも深い感激を覺え心服敬仰せざるものは無かつたのである。

六、利他益世

大道は遠くして遵ひ難く邪徑は近きが故に踐み易し、とは世間の習ひであるが、氏に於ては何事に對しても邪道を排して正道を選び、居常儉素に身を修めて德を人に施し、他の福利を思念して人の爲に最善の力を注ぎ、思慮高遠に周密で公共の爲に遠く慮り、利他益世を信條として終始せられた。

彼の市制施行前後に於ける不眠不休の奔走努力の如きは實に筆舌に表現出來ないものがあり、たゞ一念港灣清水の向上發展を圖つて辛勞を厭はず、複

雜な懸案解決のために私財を投じて先憂後樂の實を踐み、只管鄕黨の開發に盡瘁されたのであつた。その社會の爲に熟慮して善なりと決すれば莫大な金を立替もし寄附もすれば、出來る限りの努力を拂つて夫れが多少なりとも利他益世になることを何よりの滿足とされたのである。

氏が快く大金を放擲して紛糾問題を圓滿に解決された事は屢〻であつたが、嘗て郡制廢止の際巴高等女學校を縣立移管にする懸案があつて、移管費調達のために郡有林を清水市が十萬圓位で買ふことになつた時、郡會は夜半に及んでも金策不如意の爲解決困難に陷つた實情を察した氏は鄕土の爲に深く慮り、快然六萬圓を出して個人名義に一時購入し、後日になつて其の儘之を讓渡されたことがあつた。公共の爲を思ひ山林の形も一見せずに購入を引受けた誠意と剛腹さとには關係者の齊しく感動する所であつた。この山林こそは今の清水市有林である。

長谷川縣知事の當時、根岸氏を操縱士として飛行機に依る魚群探見の事業を起した事があつた。而し知事の榮轉後間も無く之は中止となり、同氏は日本飛行學校に行かれて終つた。その頃高層氣流を研究して居た氣象臺の技師關口鯉吉氏が飛行機でこの研究を試み度いと考へ、令兄の加藤周藏氏と相談し同氏の斡旋に依つて根岸氏に依賴することになつた。ところが飛行機が不良で間に合はず、陸軍の古物を拂ひ下げても三四千圓は要するので、遂に加藤氏は清水に舊友の關係ある氏を訪れ事情を話して援助を賴んだ。元來公の事に熱意を有する氏は隻語も言はずに快諾して、早速五千圓の小切手を渡されたのであつた。三保燈臺の附近に高層氣流研究所の建設されたその蔭には、氏のかくれた偉大なる盡力が存するのである。

氏が生涯を通じて社會公共の爲に献げられた資は幾萬に達するか實に莫大なものであるが、而も自ら之を他に語らず何の貢献も無い風情に過ごした所に、飽くまで偉大な奥床しい人格が窺はれるのである。

七、關東震災に於ける活躍

帝都を灰燼に歸せしめた大正の震災は既に恐ろしい昔の思出となつたが、

當時清水港で救援の爲に寢食を忘れて献身的に努力した氏の功績を忘れてはならない。

大正十二年九月一日、此の日は市制施行上の手續關係で朝來時の清水町長山田勝四郎氏と共に合併關係町村代表者と會見折衝し、更に縣廳に出頭して用談中であつた。午前十一時五十八分、突如として大地震が勃發したのであるが、何人も關東に未曾有の大震火災が起きたとは夢想だにしなかつた。恰もその際清水港に商船グラスゴーが碇泊して居たので、之に午後四時頃無線電信が入り、京濱地方全滅の驚くべき情報が傳へられ、折しも本船へ出張中の鈴與商店係員は、縣廳に用談中の氏に之を急報した。蓋しこれこそ大正大震災の靜岡縣に於ける最初の報道であつたのである。急遽歸宅した氏は直ちに店員を督して救援の對策を講じ、先づ以て漬物其の他食糧品を買ひ集め、見舞の仕度を調へて居るうちに夜となつた。何しても電信電話は勿論、東海道線が不通となつたので船便に依る以外全く杜絶して、清水港が京濱に對する唯一の咽喉となつたのは當然である。この夜また米國から横濱に入港したばかりの商船プレジデント・マッキンレーが避難民を載せて清水へ回航したが、後の話では同船に食糧の貯へも無かつたので航行中食事を差控へ、清水港安着の豫定を確め駿河灣に入つてから全食糧を乘客に提供してしまつたといふことである。かくて忽ち港は大騒ぎとなり波止場は着のみ着のまゝの負傷した避難民で混雜を呈したので、氏は率先彼等の爲に手當休養の手配をなし、先づ以て清水町實相寺住職中村辨康氏に依頼して同寺内に之を收容した。翌日は汽車の便を失つた焦慮の人々が頻りに港へ押寄せて來た。已む無く東京に自分の家を持つ者だけを選んでグラスゴーに便乘を頼み、更に救恤品や食糧米を携帶して店員數名同乘し現地に急行することになり、二日の午後八時に同船は清水を出帆したのであつた。その後清水町役場へ關東方面の避難民を軍艦に收容して清水港へ回航する旨の入電があり、四日にはシンガポール丸が横濱の避難民七十名を乘せて入港し、軍艦迅鯨も避難民を滿載して入港し、九日には練習艦隊の軍艦淺間、次で磐手、八雲が入港し、爾來この三艦は東京、横濱、横須賀、清水間を回航することになつた。かゝるうちに政府

は關釜連絡船二隻と日本郵船の二隻と合計四隻を以て京濱と清水間の輸送を行ふことゝなつたが、此の間に處して氏は避難民の爲に艀五隻を一週間の餘無料で提供し、尙郵船等に依る輸送に際しては全く低廉の料金で奉仕し、其の他一切の行動は悉く社會奉仕と同胞愛の熱意とに基き、家人、店員亦擧げて誠意を竭されたのであつた。當時鈴與商店は全く救援事務所に開放され、二階は海軍救恤班員に提供し、練習艦隊はこゝに司令部を置き、階下は靜岡縣廳救恤事務所並に靜岡運輸事務所出張所に提供して、店內は月餘に亙り大混雜を呈し、店の仕事は殆んど休業狀態に置かれ、事務の處理も土間或は室の片隅で行ふ有樣で、家人の居室も無くなる狀態であつた。氏は自店を救援事務の爲に一切を提供すると共に、自身は不眠不休の活躍を續け、運輸の便を圖るために店用船は固より漁船に至るまで動員して任務の遂行に勗め、或は物資の調達、避難民救護に全力を注ぎ、終始回航船舶と連絡を密にして避難者の海陸輸送連絡並に荷物の世話を始め、見舞品、救恤品の扱ひ、縣よりの救恤品輸送及び郵便物輸送の世話に至るまで献身的に盡瘁し、更に官公署の復興資材、一般建築材料の斡旋より、米穀食糧品の輸送を引受けて誠心誠意救援の事に貢献せられたのである。また店員をして入港船より新情報に接する毎に、之を大書して要所に掲示させ一般に知らせる樣な機宜の方法を執られた。

繼つてこの大震災の爲に横濱港は一瞬の間に壞滅烏有に歸し、貿易に一大頓挫を生じたのであるが、生糸貿易の重要性に鑑みて業者は横濱貿易復興會を組織し、餘燼の未だ收らぬ九月十七日に生糸市場を開いた。而し鐵道や道路の破壞夥しき爲海路輸送に依る外なく、遂に清水港に横濱貿易復興會の出張所を設置する計畫を樹て、之が援助協力を氏に懇望されたのであつた。此の時氏は快く之を應諾し私財を投じて事務所の設備を整へ、出來る限りの援助を與へて貿易復興の爲に盡力されたので、横濱港は辛うじて貿易港の面目を保ち產業振展の爲にも寄與する所甚大なるものがあつた。横濱貿易業者は長く氏の仁俠を德として深く敬仰して居るのである。而してこれは横濱港の爲ばかりで無く、轟て清水港の發展に資する所亦甚大であつた。

氏は關東の大震災に際して社會奉仕はこの時こそと、全く寢食を忘れて救

援に最善の努力を拂はれ、各方面に盡された功績は實に偉大であつたが、唯々社會報恩の一端を踐んだのみと考へて、自己の努力を尠しも他に漏らす樣なことは無かつた。當時昌子令夫人は家人を督勵して避難民のために晝夜を別たず入浴の便を與へ、或は連日連夜に亙り、むすびの接待をなすと共に、團長として清水町女子青年團の活動を促し、毎日三度三度の避難民收容所の食事を調へる等、洵に不眠不休の活躍を續けられた。避難民の中には全く手荷物一つ無く着たきゝの者が多かつたので、夫人は幾十反といふ浴衣を作つて之を與へ、罹災者に優しい手を伸べられたのであつた。清水人士や醫師、寺院等の一二ヶ月に亙る救援の努力は實に敬服すべきものがあつたが、殊に一家を提げて博愛の實を擧げた氏の業績は感激に堪へない所である。

大正震災と清水港との一記錄

九月一日、午後八時に至り清水水産試驗場無線電信の傍受に依り東京横濱方面の被害激甚なる狀況が判つた。

九月二日、午後五時米國商船ヂエフアーソン號に縣吏乘船横濱に向ふ。午後八時グラスゴー清水港出帆横濱に趣く。

九月三日、午後五時海洋丸東京向け出港。

九月四日、横濱避難者七十名シンガポール丸にて清水に入港。軍艦迅鯨避難者を乘せて清水に入港。

九月五日、清水水産試驗場無線電信を震災救濟に關する官報に限り使用する許可を受く。

九月六日、縣水産指導船富士丸清水出港東京に向ふ。

九月七日、清水に震災救濟出張所を(鈴與商店内)置く。道岡知事は清水港に於ける避難者救護、物資輸送狀況を視察す。

九月八日、練習艦隊司令部を鈴與商店内に設置し、横須賀鎭守府より將校を派遣され同商店を事務所と定む。

九月九日、練習艦隊の軍艦淺間、避難者を乘せて清水に入港。次で磐手、八雲と共に三艦は同樣任務を以て東京、横濱、横須賀、清水間を回航することゝなる。

九月十日、竹田宮殿下には軍艦にて清水御出航。第二吉平丸縣吏一行を乘せて横濱に向ふ。

九月十三日、縣吏一行第三川岸丸乘船小田原に向ふ。

九月十四日、輸送木材等の現狀視察のため道岡知事清水港に出張す。

九月十八日、久邇宮朝融王殿下には清水町常磐館に御休泊、本朝八時半軍艦磐手に御乘船御出港あらせらる。

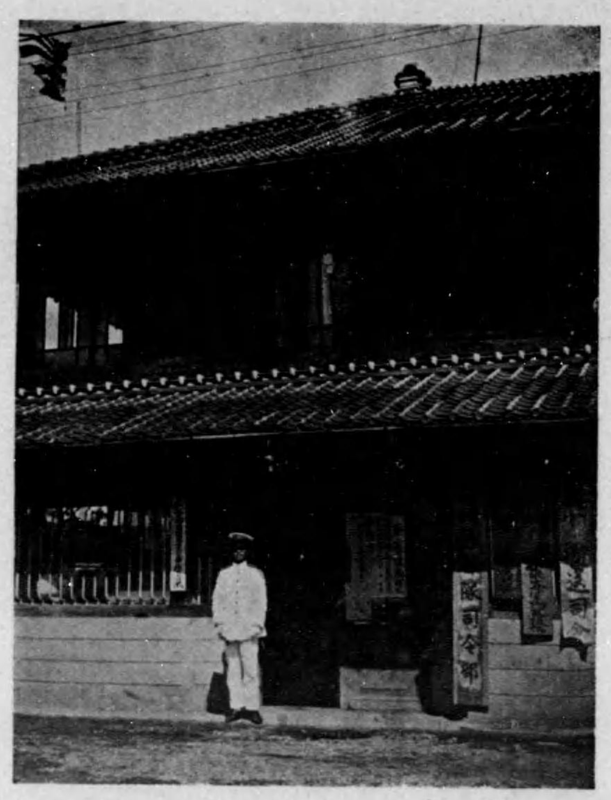
九月二十日、道岡知事清水港視察、清水に於ける練習艦隊司令部廢止せられ艦隊輸送を打切りて引揚ぐ。

九月二十二日、生糸を震災後始めて横濱に輸送することゝなり、清水港より弘濟丸に積載す。

九月二十六日、清水港に出張中の中野電信隊及び憲兵隊歸隊す。

十月十日、清水出張所を廢し縣係官引揚ぐ、横須賀鎭守府派遣員引揚ぐ。

有史以來未曾有の大地震は實に一府六縣に亙つて驚天動地の暴威を振ひ、殊に帝都の大半を烏有に歸し、横濱、横須賀市を灰燼の巷と化せしめたので、京



大正大震災の節軍隊・縣廳・鐵道の臨時事務所に充てられたる鈴興商店

濱の咽喉となつた清水港の混雜は又格別のものがあり、避難民の入港は日に一萬人を數へた騷ぎを呈し、清水に特設された醫療救護所に於て取扱つた救療人員の總數は二千三百四十三人に及んだ。當時第一救療所を埠頭に、第二救療所を江尻町に、支所を辻町に設け、重傷病者を收容する爲に清水町實相寺、妙慶寺を收容所と定め、隔離病舍を傳染病者の收容所として治療に努められたが、實相寺は九月八日より十月十五日まで主として內科疾患者と附添人千四百名、妙慶寺は外科の患者と附添人を九月十日より同月二十八日まで五百十八名收容し、隔離病舍には九月八日より十月十八日まで傳染病患者を七十八名收容したのであつた。尙、避難民の清水上陸者は八萬四千九百餘名で、如何に清水港が關東震災に對して重大な役割を持つたかを知るべきである。別に白米、副食物、建築資材其の他物資の輸送と船舶徵用についての狀況は、靜岡縣大正震災誌に明記されて居るので記述を省略する。

第十一章　罹病と逝去

一、發病と治療

大鈴興商店を雙肩に荷ひ、幾多の會社經營に加へて清水市の發展と殖產興業とのために東奔西走寸暇も無い活動を續け、不眠不休の匆忙な生活を送られたが、旺盛な精神力に依つて健康を維持し、五十七年の生涯を通じて殆んど無病息災で、只一度四十歳の頃神經痛の爲に約一ヶ月ほど病床に過ごしたことがあるのみであつた。

昭和十四年一月偶〻微熱を感じ幾分倦怠を覺え、風邪か旅行の疲れか位に輕視して居られたが念の爲に志村醫師の診察を受けると、左腹部に氣に懸る脹滿のあることを認めたので、更に原因を確證するため北村醫學博士の診察を受けられたところ「腎臟腫瘍」と診斷されたので遂に醫師と相談の上、東京築地の聖路加病院に入院することになつた。同院に於ける診斷も矢張り「腎臟上皮腫」と確定し、二月に入つて塩田博士執刀の下に大手術を行はれた。かくて數ヶ月を病床に送られたが、天下の名醫妙藥と令夫人の心からなる看護とに依つて、流石の難病も平癒し五月になつて目出度く退院が出來、一家一門の安堵は申す迄も無く鄕黨知友悉く胸を撫して喜んだのであつた。爾來餘後靜養の爲に湯河原溫泉天野屋別館に二ヶ月を過ごし、健康も充分恢復して七月の初め半歲振りで本邸に歸られた。この二ヶ月は一生に於ける最大の休養であつた、と家人に言はれたといふことである。全く多忙な活動に終始して未だ溫泉保養の閑暇も無く、病氣靜養のためには始めて溫泉に親しまれた程で、その不斷の精進に對しては洵に感激に禁へないものがあつた。

二、病氣再發と病床生活

湯河原の靜養で體重も殊の外增加し、健康恢復の確信を得て歸邸すると間も無く、各層各方面の切なる懇望を辭み難く遂に決然立つて貴族院議員の選

東京築地聖路加國際病院
屋上サン・ルームにて
（昭和十四年十二月末）

擧戰に出馬し、輿望の歸するところ目出度く最高點で當選し、九月二十九日を以て貴族院議員に勅任の光榮を擔つた。かくて酷暑の夏も多忙に過ぎ秋風立ち初む十月には、縣會議員總選擧のために己を忘れて盡力されたが、身は鐵石に非ず遂に健康を損ひ病氣再發の徵候を呈したので、家人の憂慮措く所を知らず、再び聖路加病院に診察を需め入院加療の已む無きに至つたのである。

氏の入院が自然に傳へられると、聞く者孰れも衷心より不安を痛感し、市民齊しく愁眉をひそめ、曩の病氣が病氣だけに蔭ながら一抹の淋しさを覺え、只管平癒の速かなる樣神佛の御加護を祈願するのであつた。

入院當初は幾分痛みもあつたが安靜と適切な療法の效に依つて痛みも追追薄らぎ病狀は左程憂慮すべき程でも無く、主治醫から再手術の必要も無いと聞いて令室始め家人一同漸く愁眉を開き、十一月頃よりは病院内の散歩や日光浴も出來るやうになり、健康も漸次恢復の一途を辿り醫院内のクリスマスにも參列される程であつた。

いつしか療養に秋も過ぎ歲も暮れて、病院に紀元二千六百年の元旦を迎へ

られたのであるが、感慨無量の心境洵に察するに餘りあることであり、胸中深く憂ひを秘めて自ら勵ましつゝ日夕を病床に侍つて、越年を共にせられた御令室の心懷亦坐ろなるものがあつた事を深く推察されるのである。

聖戰第四春、意義深遠なる世紀の歳旦に當り、氏は夫人に支へられて靜かに病軀を屋上に運び、恭しく宮城を遙拜して臣子の赤誠を捧げられた。そして貴族院に未だ一回も登院の出來ない事を心に詫びながら專念加療して恢復の後は渾身の努力を以て必ず臣節を全うすべきことを誓ひ、種々元旦の計を樹てられたのであつた。一生を通じておそらく之が最初の悠閑な迎春であつて、此の日は病院に年賀をも受けて快く過ごされた。然し其の後食慾は日に衰へ家族近親の心配は一方で無く、踵を次いで頻りに來訪する見舞客にも面會を謝絶し、專ら安靜を要する病勢に變つていつた。でも氏は力めて食物を攝り榮養に細心の注意を拂つて病魔の征服に努力されたことは、側の見る目も氣の毒に禁へない感じに打たれたとの事である。

長の病院生活に於ては誰しも堪へ難い苦惱があり、言ひ知れぬ不滿を懷く

ものであるが、氏は少しの不平も我儘も無く來る日來る月たゞ醫師と看護人とに一切を委ね、自然に隨順して全く悟道の心境に終始されたので、仕へる看護婦達も窃かに感泣を催すのであつた。

病態の梅花も馥郁と薫り、いつしか紀元の佳節を床中に迎へることゝなつた。世紀の奉祝に元旦の試筆を考へられたが思ひ止つたので、今日意義深い佳辰こそは何か記念の揮毫をし度いものと切に念じられたが、筆執る氣力も無く遂に斷念して終つた。この頃は既に隨分衰弱も加はり病勢も募つて居たのである。

病中に語られた事は總べて時局の問題と清水市の將來に關する事柄で、一切公事に念慮を離さず少しも私事雜事を顧慮せられなかつた。柳の糸に漸く翠を含み春風の野に訪づれる彌生の頃となり、或日何を感じられてか夫人に向つて「醫者は何と言はれて居るか」と問はれたので、夫人は憂ひを秘めて眞心から優しくこれを慰め、病氣と壽命とは違ふことを說き心を籠めて再起の力を付けながら、人知れず心を痛めるのであつた。

上野の森に櫻が咲いて都の空に霞の靄く春が來ても、病勢は募るばかりで家人の愁眉を開くすべも無かつた。四月十七日、急に筆硯を取り寄せられ寢臺に端坐して色紙に、

至誠奉公。　以和爲貴。　堅忍自重。　貴和。

と鮮かに揮毫されたのであるが、これぞ氏の絕筆であり、この字句こそは終生實踐躬行された尊い信條であつて、紙上躍如としてその人格を偲ばれるのである。以來衰弱は愈〻加はり重態となられた或日、枕頭に侍つて居た嗣子一郎氏に對し「御恩を忘れるな。間違つた事をするな。兄弟仲良くせよ。他の事は平素敎へてある通りにすればよい」と沁々訓へられたが、軈て之が最後の言葉となり、遺言となつたもので、その後は更に言葉を聽く由も無かつた。洵に何人も實踐すべき貴重な敎訓であり、慈父としての至言であつて感激に堪へないものがある。

惟ふに平素何事も獨斷專行を避け、家人に萬事を打明けて一切を明瞭に處理し、日常生活を明確にして居られたので全然不明に屬する事柄など更にな

く、日々維臨終の周到な心構を以て毎日眞摯入魂の生活をされたのである。さればその長き病床に在つて念頭を去來するものは、私事に關せず己を思はず社會公共の爲以外に何ものも無かつた。

三、逝去と悲しき歸邸

憂愁深く閉す裡に四月も晩れて月がかはると忽ち危篤に陷り、遂に天下の名醫も良藥も功を奏せず、內室令息方の手厚い年來の看護も甲斐なく、昭和十五年五月二日午前三時五十分、悲しくも家族近親に護られつゝ五十八年を一期として眠るが如く大往生されたのである。

悲電一度び飛んで鄉黨の驚愕愁嘆譬ふるにもの無く、巨星地に墜ちて暗憺たる思ひがあつた。此の日恰も清水市に於ては市會議員總選擧の最中で、訃音を傳へ聞く者齊しく沈痛の色を浮べ、指折り數へて名議長滿十六年の偉大な功績を偲びながら、奇しくも滿期の當日を以て永逝された事に想到し、飽くまで熾烈なる責任感に終始されたことを讃へないものは無かつた。

鈴木家に於ては未だ喪を秘し、危篤の儘自動車で歸邸することになり、途中の出迎へ等一切遠慮されたのであるが、哀愁の市內に漲るところ決してそのまゝ措くことは出來なかつた。午後三時、聖路加病院に於ては遺骸を靈柩自動車に遷され、昌子令夫人淋しく之に同乘し、令息近親の自動車も隨行して一路東海道を下られたが、清水に於ては本邸到着の時刻を見計ひ、市會議員を始め市內有力者擧つて門前より沿道に立ち並び、夜陰に聲を呑んで默々とその到着を待つのであつた。山田市長始め特別關係者は自動車で出迎に東上し、途中から靈柩に隨ひ午後十一時門前堵列の人々が哀悼の涙を注ぐ中を肅々として靈柩自動車は本邸に安着し、遺骸は恭しく懷しの居間に安置されたのであるが、敬弔悲痛の人達はいつまでも門前を低徊去るに忍びなかつた。

顧れば昨秋十月九日、再度入院して以來實に半歲を越え、こゝに悲しくも聲なき歸還をされたのである。溫容聲咳永へに再び接するに由なく、鄉黨ひとしく徒らに痛惜の涙に咽ぶのみであつた。

さるにてもこの年月明け暮れに平癒を祈念して再起の望みを繫いで居ら

れた令室の感慨や如何に、令息方の慈父と永別の愁嘆や如何に、別けても函嶺の晩春杜鵑一聲血に啼く夕、夫君在世の事共頻りに偲ばれて、獨り沈思斷腸の山越えする令室の胸奥を察すれば洵に涙なきを得ない。此の日二男要二氏は急報を手にして遠い濠洲から歸航の途中で、波濤萬里雲煙漠々、憂愁深く扃して心は飛べど船中如何ともし難く、遂に尊父の臨終に侍る事が出來なかつたのは、嘸々遺憾であつた事と同情に堪へない。

四、餘　榮

畏き邊りに於かせられては、氏の大なる在世中の功績を聞召され、昭和十五年五月二日、特旨を以て、從六位に叙し位記を追賜せられた。

第十二章　市葬の盛儀

一、火化の儀

飾られた居間に安らかに眠る遺骸は三日の間、家人近親と特別知己とに護られて濕やかにも通夜を重ね、五月四日午後二時を期して茶毗の儀を行ふことになつた。この日遠近傳へ聞いて弔問の客引きも切らず、門前の街路には兩側に學校生徒、婦人團體、其の他送哭の人を以て堵牆をなし、靈柩車に續いてハイヤー、バス幾十臺と用意され、讀經が終ると定刻市營火葬場に向はれたが、十數町に連る送葬の車列は洵に巨人の德を偲ばせるものがあつた。行列が火葬場に到着した時は既に域内立錐の餘地なく惜別の人に埋められ、午後二時の過ぎる頃、讀經の聲も悲しく點火され順次燒香も濟み、嚴肅盛大な火化の儀を了したのであるが、孰れも去りやらぬ氣持で矢部山の綠も悲痛を含み、梟

月の空は哀咽の煙に霞むのであつた。

この夜邸宅の樓上、各方面より贈られた麗しき造華生花の山なす中に遺骨は安置せられ、本葬の當日まで夜毎に通夜を營む事となり、法名は大本山東本願寺管長より左の如く贈られた。

覺成院釋法薫正定聚位

二、市葬の儀

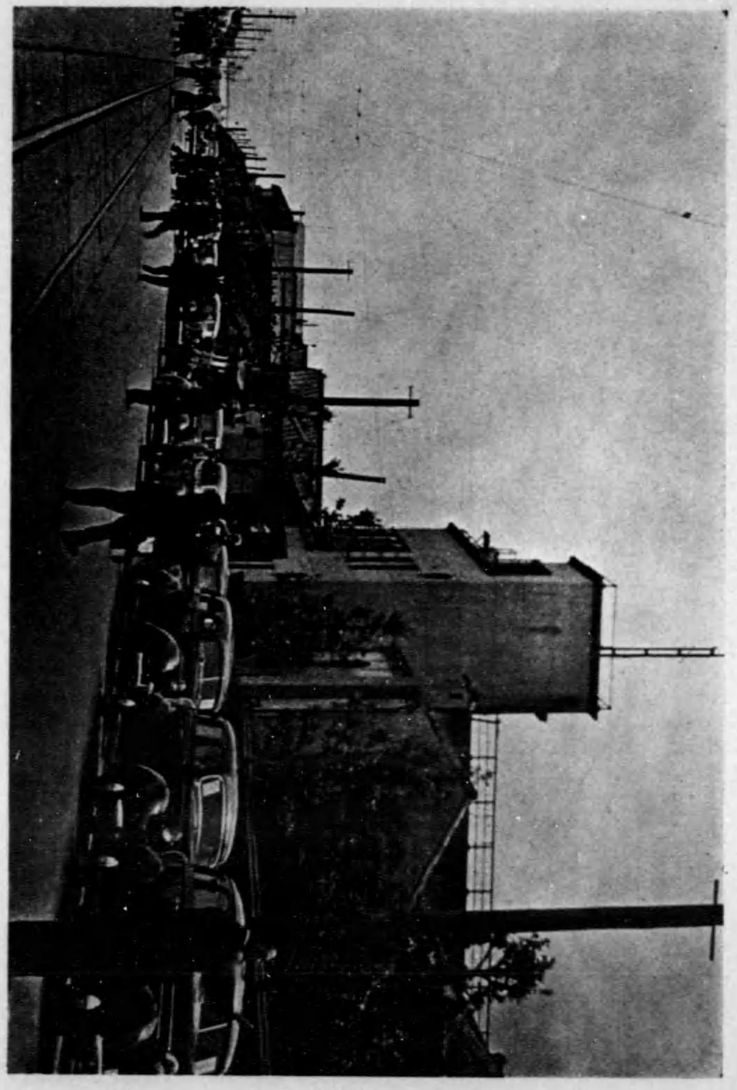
清水市に於ては五月二日、市會議員選擧の終了を俟つて午後八時より緊急市參事會を開き左記決議を行ひ、爾後鈴木家と連絡打合の上諸般の準備を整へて市葬を執行することになつた。

參第一一號

市葬執行ノ件

鈴木與平氏逝去ニ付市葬ヲ執行スルモノトス、

右市制第九十一條第一項ニ依リ之ヲ附議ス



前邸本の中意用發出へ場葬火（時一後午日四月五年五十和昭）

御遺骨葬場に遷さる　（昭和十五年五月十二日午後）

昭和十五年五月二日　清水市長　山田勝四郎

鈴木家に於ては次子要二氏の濠洲より歸着を鶴首して居たが、電報に依つて漸く歸國の日も判明したので葬儀の日取も十二日と確定し、紙上左の謹告を載せることになつた。

貴族院議員前清水市會議長清水商工會議所會頭鈴木與平氏本月二日御逝去被致候間此段謹告仕候　追而葬儀は市葬に依り佛式を以て來る十二日午後一時清水市堂林忠愛高等小學校に於て執行可致候

尚故人の遺志に依り生造花御供物等は固く御辭退申上候

昭和十五年五月四日　清水市長　山田勝四郎

父鈴木與平儀豫而病氣療養中ノ處五月二日午前三時五十分永眠仕候間生前ノ御厚誼ヲ深謝シ此段御通知ニ代ヘ謹告仕候　追而五月十二日當市忠愛高等小學校講堂ニ於テ市葬被相營候後午後二時半ヨリ三時半迄告別式執行可仕候　尚故人ノ遺志ニ依リ花輪御供物等ノ儀ハ堅ク御辭退申上候

昭和十五年五月四日

清水市入船町三丁目十二番地
嗣子　鈴木一郎
外親戚一同

其の後市に於ては新舊市會議員、商工會議所議員等を葬儀委員に擧げて夫夫分擔を定め、鈴與商店に於ては安藤、栢森兩重役指揮の下に萬端の手配を行ひ、市役所と連絡協同して準備に遺漏なきを期し、その日の迫るを待つた。

氣遣はれた天候も快晴に惠まれ葬儀場は計畫通り整備された。堅く遠慮された花輪も贈呈者の切なる衷情遂に辭み難く其の數實に五百を超え、式場も沿道兩側も全く造花を以て埋められ、會葬者は無慮一萬餘に達し、戰歿將士の葬儀を除いては蓋し地方空前の盛儀で、今更の如く故人の偉大なる人德が偲ばれて感激禁ぜざるものがあつた。

式場祭壇は德川圀順公爵家、藤原商工大臣、松野鐵道大臣、靜岡縣知事、齋藤部隊長を始め、施主市長、市會議員一同、商工會議所議員一同、清水市教育會、其の他各方面より贈られた花輪、供物又び原田熊男男爵を始め、諸名士より贈られた盛花を以て埋められ、嗣子一郎氏夫妻、まさ子未亡人始め多數の遺家族、東本願寺管長代理、代理葬儀委員一同、鹽野前法相、貴族院議員代表、小濱靜岡縣知事、日本赤十社長代理、縣下市長代表、全國並に縣下市會議長代表、東海會議所會頭代表、政友會縣支部長山口代議士、深澤衆議院議員、日本鮪類罐詰業水産組合代表、日本郵船株式會社々長、靜岡縣教育會長、靜岡三十五銀行頭取、縣會議員、官公署長、各種團體長、東西實業界關係者、市內各區長、團體長等參列者を以て堂を滿たし、場外も亦身動きも出來ぬほど夥しい會葬者であつた。斯くて滿場肅然たる裡に曾我專念寺住職導師を勤め、同派寺院住職及び清水市佛敎會員僧侶の讀經も濕やかに式は進み、東本願寺管長、代理山田市長、鈴木貴族院議員代表、小濱知事、堀市會議員代表、其の他二十餘名の燒香並に弔辭朗讀の後、弔電弔辭の披露捧呈があり、再び讀經の裡に順次燒香を終り、施主市長の挨拶、葬儀委員長の閉式の辭があつて午後三時、嚴肅盛大に滯り無く葬儀を終了し、更に式後、夥

多の一般會葬者と特別關係者との爲に特に鈴木家の告別式が執行された。

この日寄せられた弔辭は五十四通、弔電は實に一千六百二通の多きに達したのであるが、茲に故人の多岐に亙る社會活動の一端を偲ぶ爲に其の一部を抄錄すれば、

○朗讀した弔辭

東本願寺管長、清水市長、貴族院、靜岡縣知事、清水市會代表、清水商工會議所代表、日本赤十字社長、縣下市長代表、全國並に縣下市會議長代表、東海會議所會頭代表、清水市教育會代表、政友會靜岡縣支部長、日本鮪類罐詰業水產組合代表、日本郵船會社長、靜岡三十五銀行頭取、横濱生糸問屋組合代表、如水會代表、鈴與商店代表。

○朗讀した弔電(敬稱省略)

內務大臣兒玉秀雄、男爵平沼騏一郎、公爵一條實孝、公爵德川圀順、侯爵西鄕從德、侯爵黑田長禮、伯爵樺山愛輔、伯爵二荒芳德、結城豐太郎、永井柳太郎、久原房之助、佐藤尙武、鹽野季彥、後藤文夫、吉野信次、小泉信三、水野錬太郎、八田嘉明、德富猪

內　場　葬　市

外　籍　軍　團

一郎。

○芳名のみ呼稱の弔電(敬稱省略)

戸塚北海道長官、川又名古屋稅關長、鳥田陸軍少將、縣名古屋市長、靑木横濱市長、宇垣日本靑年協會長、江口貴族院議員、丸山鶴吉、增田次郎、高島王子製紙會社長、杉山金太郎、大谷登、村田大阪商船會社長、山下亀三郎、川崎汽船株式會社、栗林商船會社長、黑川國際汽船株式會社長、河手三菱鑛業株式會社長、窪田日魯漁業會社長、松方東京自動車工業會社長、小倉房藏、櫟木朝鮮郵船會社長、伊藤松坂屋社長、武藤大日本國防婦人會長、岡田政友會幹事長。

○捧呈の弔辭(敬稱省略)

帶廣商工會議所會頭、直江津商工會議所會頭、靑森商工會議所會頭、東京七曜會、武藏高等學校長、清水食品株式會社、清水市米肥商組合、清水署管內自動車營業組合、清水市清水小學校保護者會、共生會、沼津市長、全國輸出罐詰業水產組合聯合會、山梨縣木炭商業組合聯合會、靜岡縣木炭商組合、靜岡縣石炭統制組合、清水警察署長、靜岡縣教育會長、靜岡縣育英會、如水會靜岡縣支部、鈴與清睦會、日本

農產罐詰共販株式會社、五十嵐眞吾、福羽撚糸株式會社、東亞燃料會社長、靜岡稅務署長、濟生會長德川家達、立憲政友會清水支部、日本蜜柑罐詰工業組合聯合會副理事長、東亞海運株式會社河田烈、靜岡倶樂部理事長、靜岡中學校保護者會長、港灣協會靜岡支部長、靜岡地方裁判所檢事正安倍輔、大昭和製紙株式會社長、長澤雄楯、加茂喜代作、靜岡縣國防協會長、須山英次郎、狩野閏八郎。

○敬弔の書翰(敬稱省略)

公爵山縣有道、侯爵池田仲博、子爵西四辻公堯、男爵阪谷芳郎、男爵井上清純、伍堂卓雄、吉田茂、眞鍋嘉一郎、貴族院議員菊池恭三、同堀啓次郎、同岡喜七郎、同中川健藏、同佐藤三吉、同犬塚勝太郎、同建部遯吾、函館商工會議所會頭岡本康太郎、川越市會議長河合正臣、其の他。

三、弔辭抄

○清水市長弔辭

綠蔭ノ殘花頻リニ愁ヲ惹ク夕、貴族院議員前清水市會議長清水商工會議所會頭鈴木與平氏溘焉トシテ易簀セラル、眞ニ痛恨ノ至リニ堪ヘス。

茲ニ恭シク市葬ノ儀ヲ擧ケテ七萬市民敬弔ノ誠悃ヲ捧ケ謹ミテ淨土ノ永生ヲ祈ラントス。惟ルニ貴下ハ明治十六年二月本市上清水ノ舊山崎家ニ生ヲ享ケ、幼ニシテ寧馨ノ譽高ク、夙ニ鈴木家ニ入リテハ明治三十七年、東京高等商業學校ヲ卒業更ニ專攻部ニテ研鑽ノ功ヲ積ムコト二年、明治三十九年其ノ學才ヲ惜シマレツヽ、鄕里ニ歸リ家道ニ從ヒ實業ニ身ヲ委ネラル。

大正六年五月衆望ヲ負ヒテ清水町會議員ニ選ハレ茲ニ貴下カ經世ノ志望ト其ノ行藏ヲ傾ケテ地方自治ノ發展ニ盡瘁セラレタル公生涯ノ第一歩ヲ踏ミ出サレタリ。次テ大正八年四月靜岡稅務署所轄內營業稅所得稅調査委員ニ、同年九月靜岡縣會議員ニ當選、同十年五月清水町會議員、同十二年十月靜岡縣會議員ニ再選セラレ此ノ間清水港修築事業ノ促進、清水市制ノ實施上ニ示サレタル貴下ノ熱誠努力ト卓拔非凡ノ識見手腕ハ眞ニ推重敬服ニ餘リアリ、蓋シ躍進清水港今日アルハ其ノ大半ヲ貴下ノ功ト爲スモ敢ヘテ過言ニアラサルヘキヲ信ス。清水市制成ルニ及ヒ大正十三年四月清水

市教育會長ノ職ニ就キ同年五月第一期清水市會議員ニ當選スルヤ輿望ノ歸スル所滿場一致ヲ以テ市會議長ニ推サレ、爾來再選重任ヲ累ヌルコト四期十六ケ年ニ亘リ、更ニ昭和二年十月三度靜岡縣會議員ニ選ハレテ同五年十一月縣會議長ノ榮職ニ就任シ、同年八月清水商工會議所議員ニ當選スルヤ初代會頭ニ推サレテ現在ニ及ヒ、昭和十四年九月貴族院多額納稅者議員選擧ニ際シテハ最高點ノ榮冠ヲ克チ得テ同月二十九日貴族院議員勅任ノ光榮ニ浴セラレタリ。　其他貴下カ二十五年ノ政治的生涯ヲ通シテ携リタル教育、產業、稅務、土木、衞生、社會事業等ノ公共事業ニ關スル公職ニ就テハ洵ニ枚擧ニ遑ナク而モ往ク處至誠一貫拮据精勵渾身ノ力ヲ致シテ毫モ倦ム所ナク凡百ノ公職ヲ通シテ本縣並本市ノ政治經濟界ニ遺サレタル偉大ナル足跡ハ光彩陸離トシテ之ヲ述ヘントスルモ千言萬語尙盡シ難キヲ憾ムノミ。　就中今次事變發生以來率先垂範出征兵ノ歡送遺家族ノ慰問慰藉等銃後々援事業ニ竭サレタル銃後奉公ノ熱誠ニ至リテハ市民ヲ擧ケテ感激感謝措カサル所ニシテ蓋シ昭和十五年二月陸軍大臣ヨリ軍事功勞者トシテ旌彰セラレタル所以ナリ。　又貴下ヲ市會議長ニ戴キタル清水市會カ既往十六ケ年ノ長キニ亙リ圓滿明朗和氣藹然トシテ克ク市政ノ暢達ニ盡スヲ得タルハ偏ニ貴下ノ高潔偉大ナル人格ノ賜ニシテ東海ノ名議長ト芳名ヲ謳ハレタルハ眞ニ故ナキニ非サルナリ。　飜ツテ實業界ニ於テモ父祖傳來ノ囘漕業ヲ中心ニ十指ニ餘ル大事業ヲ擁シテ隆々進展ノ趨勢ニアル鈴與商店カ幾多傍系會社ノ樞軸ヲ爲シテ中部日本ニ蔚然タル一大事業王國ヲ形成スルノ壯觀ハ天成ノ大事業家タル貴下一代ノ籌畫奮鬪ノ結晶ナリト謂フヘク、更ニ日本輕金屬株式會社監査役、靜岡三十五銀行、駿州銀行取締役等ヲ始メ中央地方ノ產業、金融、交通、運輸事業ニ關係シ本縣實業界ノ發展振興ニ寄與セラレタル勳績ハ光芒燦然トシテ其ノ政治的偉功ト相俟チ後代不滅ナルヲ確信シテ疑ハサルナリ。　虔ミテ稽フルニ貴下ノ爲人重厚謹嚴ニシテ誠實調和ヲ旨トシ、人ニ接スルヤ恭儉寬容己ヲ持スルコト峻嚴ニシテ言動ヲ苟クモセス而モ內ニ烈々不動ノ信念ヲ藏シ一旦熟慮斷行ヲ期スルニ於テハ飽ク迄所信ノ貫行實踐ニ邁往シテ止マス、故ニ鄕黨其ノ德風

ニ悅服信賴シ交友又其ノ大器ニ感銘シテ百年ノ知己トナル。世人貴下ヲ稱シテ一代ノ人格者トナスモ寔ニ偶然ナラサルナリ。貴下昨夏九月大患ノ後ヲ受ケテ貴族院多額納稅者議員選擧ニ立候補セラル、ヤ颯爽ノ英氣ヲ示シテ市民ノ愁眉ヲ開カシメタルニ十月再ヒ病ニ伏シテ第七十五議會登院ノ期待モ空シク長ク療養ノ已ムナキニ至リ家人ノ誠心周到ナル看護モ鄕黨ノ平癒祈願モ名醫名藥悉ク人力ヲ傾ケシモ其ノ甲斐ナク遂ニ玉蘭摧折ノ悲報ニ接ス、愁嘆悵恨何ソ堪ヘンヤ。時恰モ時局重大ニシテ本市マタ大清水市建設ノ理想ニ向ヒ一大轉換ノ時運ヲ迎ヘ貴下ノ經綸ニ俟ツモノ益〻多カラントスルニ當リ茲ニ市政ノ儀表的巨人ヲ喪ヘルハ眞ニ暗夜ニ大光明ヲ失スルノ痛恨事ト謂フヘシ。嗚呼悲シイ哉。然リト雖貴下在世ノ行績ハ永ヘニ亡フルコトナク貴下ノ德風ハ長ク鄕黨後進ノ間ニ生キテ市政ノ上ニ彌〻光輝ヲ加フヘク、家ニハ父君英邁ノ資ヲ嗣キタル一郎君始メ四人ノ令息アリ、貴下ノ遺業ヲ繼承シテ遺憾ナカルヘシ、況ンヤ勳績既ニ畏クモ天聽ニ達シ特ニ敍位ノ恩命ニ拜浴ス。想ヘハ人生至上ノ榮譽ニシテ誠ニ健羨ノ情ニ堪ヘサルモノアリ。英魂以テ瞑セラルヘキ乎。不肖マタ貴下ノ驥尾ニ附シテ公私ノ事ニ啓發セラル、コト多年、市制施行當時ノ盟友悉ク去リテ顯幽ノ境ヲ異ニシ特ニ創市ノ理想タル大工業都市ノ建設事業モ既ニ其ノ緒ヲ開キ近ク幾多國策大工場モ完成シテ一齊ニ操業ヲ開始セントスルノ時、今茲ニ既往ヲ語リ喜憂ヲ別ツ可キ唯一最大ノ畏友ト其ノ壯觀ヲ共ニ歡ヒ共ニ祝福スルコトヲ得サルハ誠ニ衷心ノ恨事ニシテ不肖ノ身邊一入寂寥ノ感無キ能ハス、而シテ貴下生前ノ厚情ニ報ヒ恩義ニ應フルノ途ハ偏ヘニ其ノ遺圖ヲ繼キ遺志ヲ體シテ誠心誠意市政ノ隆盛進展ニ微力ノ限リヲ竭スノ外ナキヲ信ス。茲ニ靈前ニ跪拜シ地上最終ノ敬禮ヲ捧ケントスレハ萬感交〻胸ニ迫リ涕泣悲惻言フニ堪フヘカラス。謹ミテ哀悼ノ微意ヲ表ス。尙クハ來リ饗ケ給ヘ。

○貴族院弔辭

貴族院ハ議員從六位鈴木與平君ノ長逝ヲ追悼シ恭シク弔辭ヲ呈ス。

○靜岡縣知事弔辭

貴族院議員鈴木與平君溘焉トシテ長逝セラレ、本日茲ニ君ノ靈柩ニ對ス萬感交〻迫リ哀悼ノ念ニ堪ヘス。君資性溫柔ニシテ識見卓拔、夙ニ實業ニ志シ其ノ天禀ノ才能ト拮据飽クナキ經營トハ君ヲシテ克ク本縣實業界ノ重鎭タラシメタルノミナラス、淸水港海運界ノ中樞トシテ本邦財閥ニ列シ、貴族院議員タルノ榮職ヲ贏チ得シム。君、人ヲ待ツニ寛、己ニ處スルコト嚴、私利ニ恬淡ニシテ公事ヲ重ンシ、市政及縣政ニ參與シ、淸水市會議長タルコト十有六年ノ長キニ亙リ、常ニ高邁ナル識見ト剛健ナル志操トヲ以テ克ク時流ヲ導キ地方開發ニ貢献シ、特ニ地方商工業ノ振興發達ニ一段ト意ヲ用ヒ、衆望ヲ擔ヒ商工諸團體ノ重鎭トシテ業界ノ啓發ニ盡瘁シ、就中淸水港ノ開發、本縣貿易ノ伸展ニ全力ヲ傾倒シ淸水港ヲシテ名實共ニ今日ノ隆昌ヲ致サシム。君ノ令名今ヤ港名ト等シ。洵ニ宜ナリト謂フベシ。今次支那事變勃發スルヤ、君ハ身ヲ以テ戰時經濟强化ニ奔命シ、其ノ餘暇自ラ應召軍人ノ遺家族ヲ慰問シ惜シミナク私財ヲ投シテ銃後援護ニ倦ムコトナシ。鄕黨君ヲ仰ク恰モ慈父ノ如シ。今ヤ邦家未曾有ノ時艱ニ遭ヒ、國家經濟力ヲシテ益〻擴充ノ要アル秋、君ノ透徹卓越セル經綸抱負ニ俟ツコト愈〻多キヲ加ヘントス、想ハサリキ突如君ノ訃ニ接シ遽ニ幽明境ヲ異ニセントハ、何ソ哀悼ニ堪ヘン。然リト雖君カ生前ノ功績ハ畏クモ天聽ニ達シ、從六位ヲ追賜セラル、天恩ノ優渥ナル、君以テ瞑スヘキナリ。冀クハ英魂髣髴トシテ來リ饗ケヨ。

○日本赤十字社長弔辭

貴族院議員日本赤十字社靜岡支部商議員佩有功章特別社員從六位鈴木與平氏逝去セラル。君夙ニ本社ノ主旨ヲ翼贊セラレ大正十三年三月靜岡支部商議員ニ就任爾來其ノ職ニ在ルコト十有六年餘、此ノ間重要審議ニ參畫シテ支部事業發展ニ貢献セラレタルノミナラス篤志ヲ以テ屢〻社資ヲ幇助シ社業ヲ補益セラル、等其ノ功績顯著ナルハ本社ノ深ク感謝スル所ナリ。今ヤ訃音ニ接シ哀惜ノ至リニ堪ヘス。總裁載仁親王殿下ノ御沙汰ニ

依リ茲ニ恭シク弔詞ヲ呈ス。

○縣下市長代表靜岡市長弔辭

噫、鈴木與平君、君ハ今日既ニ白玉樓中ニ在リ、市葬ノ禮ニ坐シテ思出ノ生涯ニ其ノ最後ノ扉ヲ閉サントス。吾等君ノ德ヲ仰キ其ノ行ヲ慕フモノ來リテコヽニ限リ無キ訣別ノ哀苦ヲ叙フ、幽明ハ其ノ形ニ於テ遠ク隔ツルカ如クナルモ靈命互ニ相通シ眷々切々ノ情共ニ盡クル所ナキハ蓋シ君カ地上ニ遺シタル足跡ノ高ク且ツ大ナルヲ證シテ餘リアルモノト謂フヘキナリ。仰ケハ富士ハ益〻高ク駿河ノ海ハ益〻深シ、大清水市創建ノ恩人タル鈴木與平君、君ハ更ニ其ノ大築港ニ力强キ基石トナリ、傳說ト風光ト產業トヲ竝ヘ生カシ本縣下ニ於ケル海ノ玄關口トシテノ世界的躍進ニ拍車シ、重大時局ニ對處スヘキ銃後ノ使命完遂ニ寸毫ノ謬リナカラシメタル功績ハ實ニ君カ烈々ノ意氣ト順和ノ風格ト內外ヨリ相調和シタル超人的操持ニ因ルモノト云フヘク、一面或ハ市會議長トシテ或ハ縣會議長トシテ或ハ商工會議所會頭トシテ共ニ永ク地方ノ儀表トナリ、近クハ貴族院議員トシテ多難ノ國政ニ參與シ或ハ各種事業ノ統率ニ任シ、往クトシテ可ナラサルハナカリシ所以ノモノ亦實ニ君カ自ラ求メル高潔ノ先天性ニ因ルヘキヲ疑ハス。宜ナル哉、君カ生前ノ功績上聞ニ達シ特ニ位記ヲ追賜セラレ從六位ニ敍セラル、ノ光榮ニ浴セルヲ見タリ。現清水市長山田勝四郎君ハ、世ニ完全無缺ノ人アリトセハ鈴木與平君ノ如キハ其ノ第一人者ナルヘシト云ヘリ、吾等又眞ニ其ノ言ノ詐リナキヲ信ス。今ヤ東海ノ地、コノ完全無缺ノ一大偉人ヲ失フ、其ノ損失ノ大ナル、山野徒ニ新綠ヲ裝フモ以テ之ヲ償フニ足ルモノナシ、噫、哀シイ哉。爰ニ縣下思ヲ同シクスル熱海、沼津、濱松、及ヒ靜岡ノ四市ヲ代表シ、德ヲ頌シ靈ヲ慰シ以テ恭シク冥福ヲ祈ル、在天ノ英靈冀クハ來リ饗ケラレヨ。

○清水市會議員代表弔辭

本日茲ニ市葬ノ盛儀ヲ擧ケテ市政ノ功勞者故貴族院議員前清水市會議長

清水商工會議所會頭從六位鈴木與平氏ノ英靈ヲ弔フニ當リ清水市會議員ヲ代表シ恭シク哀悼ノ誠意ヲ表ス。謹ミテ惟フニ貴下ハ穎悟ノ資ヲ以テ夙ニ實業界ニ入リ明敏達識事業ノ經營ニ非凡ノ力量ヲ示シ、拮据淬礪克ク家道ヲ興シテ鈴與商店ノ隆盛ヲ致スト共ニ幾多新興事業ヲ籌畫創業シテ盡ク之ニ成功シ中央並地方ノ實業界ニ一大勢力ヲ覇持セラル、一方、天成ノ政治家タル資質ヲ伸ヘテ地方自治行政ノ發展ニ盡瘁シ公私幾多ノ要職ニ歴任シテ縱横ノ才幹ヲ揮ヒ縣政界ノ重鎮トシテ地方產業文化ノ開發振興ニ貢献セラレタル業績ハ洵ニ大ナリ。特ニ大正ノ初期以來清水港修築事業ノ實現ヲ企圖セラレ率先輿論ヲ指導シ或ハ縣會議員トシテ當局ニ運動シ遂ニ築港事業ノ遂行ヲ見テ清水港今日ノ隆昌ヲ招來スルヲ得タルハ貴下ノ献身的努力ニ俟ツ所尠カラス、今回生前ノ功績ヲ嘉セラレ特ニ從六位ニ敍セラレタル寔ニ故ナキニ非サルナリ。又市制施行ニ際シテハ全幅ノ力ヲ竭サレ市制成ルニ及ンテ市會ノ成立ヲ見ルヤ初代議長ニ推サレ、爾來四期十六ヶ年恒ニ圓滿公正總力親和ノ信條ヲ以テ市會ノ健全ナル使命ノ達成ヲ誘導セラレ、一代ノ名議長トシテ其ノ鳳名ヲ全國ニ謳ハレ清水市會ノ名聲ヲ重カラシメタルハ蓋シ貴下ノ偉大ナル人格ヲ反映シタルモノニシテ衷心敬服感謝ノ念措ク能ハサルナリ。偶〻昨夏病患ノ故ヲ以テ固ク辭意ヲ表明セラレタリシモ市會ノ總意ニ依ル熱望ト屢次に亙ル留任ノ懇請ヲ容レテ再ヒ滅私奉公ノ道ヲ選ハレタルヲ以テ一同漸ク愁眉ヲ開キテ再起ノ日ノ一日モ速カナランコトヲ祈念シツ、アリシニ天無情假スニ春秋ヲ以テセス卒然トシテ市政ノ大恩人ヲ奪ヒ去ラントハ、誠ニ痛恨ノ極ト言フヘシ。想ヘハ貴下ノ忽焉大寂ニ元歸セラレタル凶日ハ恰モ當市市會議員總選擧ノ日ニ當リ、悲報一度到ルヤ事ノ急ナルニ市民齊シク耳ヲ疑ヒシモ其ノ事實ナルヲ知ルヤ茫然自失言フ所ヲ知ラス、僅カニ冷靜ニ復シテハ市政ノ大長老タル貴下カ總選擧ノ日ニ逝去セラレタル深キ因緣ニ想ヒ到リ仰キテ長大息シ俯シテ流涕滂沱タルヲ禁シ得サリシナリ、嗚呼悲シイ哉。

貴下器度宏大ニシテ恩威コレヲ兼ネ德望内外ニ籍甚タリ、吾等市會議員ノ

職ニアリシモノ一人トシテ貴下ノ指導啓發ニ浴セサルナク恰モ水ニ魚アル如ク其ノ殊遇ニ賴リテ市政ノ上ニ力ヲ竭シ得タルモノニシテ、茲ニ貴下ノ逝去ニ際會シ眞ニ舟人舵ヲ失ヒタルノ嘆ナキ能ハス、不肖市制施行ノ當初ヨリ市會ニ席ヲ同ウシ貴下ニ親炙スルノ機會多ク特ニ昭和四年夏臺灣ニ行ヲ共ニセル際ハ貴下ト二人旅館ニ室ヲ同ウシ一帳ノ蚊帳ニ枕ヲ並ヘテ起居スルコト一週間、謹嚴重厚ナル裡ニ自ラ人情ノ深サヲ湛ヘ滋味眞ニ掬スヘキ大人格ニ觸レ且ツ談笑ノ間ニ有益ナル處世ノ教訓ト指導鞭撻ヲ受ケテ貴下ニ對スル敬慕ノ念彌〻厚カリシヲ以テ痛惜哀愁ノ情一入深キヲ覺ユ、茲ニ永別ニ際シ貴下ノ本市會ニ對スル絶大ナル功績ニ衷心ノ誠意ヲ捧ケテ感謝ノ意ヲ致スト共ニ我等一同今後益〻提携協力貴下カ其ノ信條トセラレタル圓滿公正總力親和ノ大精神ヲ市政ノ上ニ生カシ一致團結微力ノ限リヲ盡シテ大清水市建設ノ理想ニ邁往シ以テ貴下ノ後進タルノ名ニ背カサランコトヲ誓フ。英靈冀クハ微衷ヲ掬ミ給ヒ天上ノ憩永久ニ安カランコトヲ。

○縣下市會議長會代表弔辭

恭シク故貴族院議員清水市會議長從六位鈴木與平君ノ尊靈ニ白ス、聞說山水秀麗ノ氣發シテハ神仙ヲ招キ凝ツテハ偉人ヲ生スト、由來清水ノ地、巨人ヲ生ミ偉材ヲ延ク。寔ニ故アリト謂フヘシ、而シテ君亦棟梁ノ重器トシテ其ノ範疇ニ在リ、君ニ賴リテ清水ノ名甚ダ高キヲ睹ル、豈偉大ナラズトセンヤ。君ハ聰明ノ資、寛宏ノ量、圓轉ノ德ヲ具足セラレ加フルニ人ヲ待ツコト誠信ニ己ヲ持スルコト端莊恭儉ナリシナリ。宜ヘナル哉君ノ向フトコロ阻塞自ラ開ケテ坦々明朗ナルモノアリシヲ、君カ清水ニ市制ヲ施行セラレテヨリ以來連續十六ケ年ノ長キニ亙リテ市會議長ノ要職ニ在リ、尚今後ノ襲任幾年ナルカヲ測リ知ルヘカラサリシ事實ハ以テ君ノ偉大ナル人格ト貢獻トヲ欽仰スルニ足ラン。如此ニシテ君ハ政治ニ實業ニ往クトコロトシテ可ナラサルハナク志ストコロトシテ遂ケサルハナク、實ニ驚異的多方面ニ不易ノ鴻模ヲ排カレタリ。其ノ遺績ヤ其ノ偉功ヤ正ニ勝區清水ノ名ト共ニ永劫ニ朽チサルヘシ。吾等悲痛禁ヘ難シト雖强ヒテ懷ヒヲ爰ニ廻

ラシ敢ヘテ自ラ慰メントス。魂ヤ尚クハ來リ享ケヨ。

○清水商工會議所代表弔辭

花開イテ風雨之ヲ傷メ月明カニシテ暗雲之ヲ掩フ、風雨暗雲何ソ夫レ無情ナル、然レトモ花ハ復開キ月ハ復照スノ機アリ、人生一度去ラハ復還ラス、嗚呼悼シイ哉。我カ郷土ノ偉人當會議所會頭貴族院議員從六位鈴木與平氏不幸病魔ノ襲フ所トナリ扁鵲至術ヲ盡サレシモ藥石効ナク昊天無情ニシテ氏ニ歳月ヲ假サス、五月二日午前三時五十分溘焉トシテ長逝セラル。洵ニ哀悼痛惜ニ堪ヘサルナリ。氏天資聰明博學多識人トナリ溫厚篤實寡言沈着ニシテ能ク衆ヲ容レ而モ積極進取ノ氣魄ニ富ム。明治三十九年東京高等商業學校專攻部ヲ拔群ノ成績ヲ以テ卒業、商業學ノ蘊奥ヲ極メ後鈴與商店主トシテ身ヲ當市ノ實業界ニ投シ地方商工業ノ發展ニ不斷ノ努力ヲ繼續セラレ、衆望ヲ荷ヒ長ク市會議長トシテ自治ノ機ニ參與シ、更ニ大正八年靜岡縣會議員ニ當選シ爾來再選セラル、コト三期、昭和五年縣會議長ノ榮職ニ就任シ地方自治ノ圓滑ナル運營ニ努力セラレ、清水市制ノ執行ト港灣ノ完成ニハ特ニ粉骨挺身晝夜ヲ分タス邁進セラレ今ヤ全國貿易港中第七位トナリ人口七萬有餘ヲ算シ前途尚洋々タル近代的港灣都市ヲ建設シ近時國策ニヨル大會社ノ港灣埠頭ニ建設ヲ見ルニ至リタルハ地ノ利ヲ擁スルトハ言ヘ氏ノ献身的努力ニヨルモノ亦與ツテ大ナルヘク、市制執行後商工業ノ振興ヲ圖ル爲ニハ商工會議所設置ノ急務ナルヲ唱導シ、萬難ヲ排シテ之レヲ創立シ推サレテ初代會頭トシテ十年ノ永キニ渉リ本市產業ノ振興ニ盡瘁セラレタル功績實ニ偉大ニシテ今ヤ市民鼓腹擊壤シテ其ノ德ヲ稱フ、誠ニ宜ナリト言フヘシ。更ニ金融方面ニ於テハ大正六年株式會社清水銀行取締役頭取ニ選任セラレ縱横ノ手腕ヲ振ヒ大正十五年株式會社三十五銀行取締役ニ選任セラレ地方金融界ニ貢献セラレタル事蹟ハ眞ニ特筆大書スヘキモノアリ。更ニ事業方面トシテハ株式會社鈴與商店取締役社長ヲ始メトシ其ノ他運送業、倉庫業、軍需工業、食料品製造業等凡ユル業種數十社ノ社長又ハ取締役監査役等ノ重責ニアリテ實業界不出世ノ巨

歩ヲ占メ會社ノ基礎ヲシテ磐石ノ安キニ置キ地方産業ノ振興ニ偉大ノ足跡ヲ遺シ、事變以來統制經濟ノ强化ニ伴ヒ重要産業各種ニ渉リ組合制度實施セラレルヤ率先國策ニ順應シテ組合設立ニ精進シ、推サレテ十數組合ノ理事長ニ就任シ組合事業ノ發展ト物資調整ニ貢献セラレタル所絶大ニシテ組合員一同其ノ德ヲ稱フ。更ニ財務方面ニ於テハ調査委員會々長トシテ二十有餘年勤續セラレ其ノ他枚擧ニ遑ナキ公共事業ノ委員又ハ顧問ノ要職ニ就キ至誠ヲ以テ事ニ當リ、氏ノ生涯五十八年全ク寧日ナク各方面ヨリ功勞者トシテ表彰セラレタルコト一再ナラサリシモ誠ニ故ナキニアラサルナリ、昭和十四年貴族院議員ニ當選セラレ前途尙氏ニ俟ツ所頗ル大ナルモノアリシニ此ノ悲運ニ際會ス、本市ノ不幸之ニ過キサルモノナシ。今ヤ巨星地ニ墜チ暗憺タリ、氏ノ人格ノ偉大ナルヲ痛感セラル、人ハ生前偉大ナルモノ多數アリ死後其ノ偉大サヲ更ニ加フル人少シ、蓋シ氏ハ後者ノ人ニシテ其ノ人格功績ハ永ク碑ニ銘シテ滅セス、市民追憶ノ種トシテ其ノ德ヲ永ヘニ傳ヘン、本日茲ニ市葬ノ盛儀ヲ以テ其ノ靈ヲ慰ム、氏以テ瞑スヘシ今ヤ幽明境ヲ異ニシ九泉ノ路遠クシテ呼ヘトモ寂トシテ聲ナク哀悼ノ情極ナシ、茲ニ商工會議所ヲ代表シ謹ンテ弔意ヲ表ス、冀クハ英靈來リ饗ケヨ。

○清水市教育會代表弔辭

落花流水ニ無常迅速ヲ偲ハセテ、晩レ逝ク春ヲ撞ツ鐘ニ、轉タ斷腸ノ思ヲ惹ク夕、我カ清水市教育會長鈴木與平殿、溘焉トシテ逝去セラレ、本日茲ニ市葬ノ盛儀ヲ以テ萬衆恨恨ノ裡ニ敬弔セラル、愁嘆悲痛ノ衷情述フルニ由無シ、嗚呼悲シイ哉。

惟フニ貴下ハ資性寛厚篤實ニシテ風格玲瓏識見卓越シテ所信ヲ貫徹シ、行藏常ニ人倫ノ範ヲ垂レ、夙ニ鄕黨ノ先覺、稀罕ノ人格者トシテ景仰ノ的トナリ、東海ノ名議長トシテ市政ノ樞機ニ重責ヲ全ウスルコト實ニ十有六年、或ハ縣民ノ輿望ヲ擔ヒテ縣會議長ノ榮職ニ竭シ、或ハ貴族院議員ニ勅任セラレテ國政ニ參畫スル等、至誠一貫政界奉公ノ傍ラ、其ノ達識高見ヲ傾ケテ産業貿易ノ振興ニ寄與セラレ社長重役トシテ幾多ノ事業ヲ經營シ、匆忙繁

劇寸暇無キ身ヲ以テ而モ切ニ教育ノ重要性ニ三思ヲ輸サレ、衆望ヲ容レテ本會創立以來十六星霜ノ間、會長ノ重責ニ盡瘁セラレタリ。

顧ミルニ本會ノ今日アル所以ハ偏ヘニ貴下ノ教育愛護ノ熱意ト崇高ナル人格トニ基ツク所ニシテ、會員齊シク仰クニ慈父ニ接スルノ敬慕ヲ以テシ、和衷協力唯々偉大ナル厥ノ德ニ反カサランコトヲ念ヒ、感謝ヲ捧ケツヽ、人格ニ私淑シテ各〻修養諧和ノ實ヲ擧ケ、欣然奮起以テ會勢ノ進展ヲ期スルヲ得タリ。偶〻會長病褥ニ臥シ東都ニ御療養ノ報漏ル、ヤ心痛措ク所ヲ知ラス、晨ニ念シタニ祈リテ只管平癒ノ速カナラン事ヲ冀ヒシニ、一世ノ名醫藥石ノ粹ヲ蒐メ、御令室始メ御一家ノ心血ヲ注キシ長ノ看護モ遂ニ甲斐ナク、何事ソ昊天無情、壽ヲ假スニ吝ニシテ忽然寂光ノ都ニ招カレ給フ、哀レ山峰依々トシテ變ラサレトモ、清水灣頭青波碎ケテ悲情ニ咽ヒ巨星飛ンテ天地寂寞タリ、今ヤ溫容徒ラニ髣髴タレトモ謦咳再ヒ接スル能ハス、嗟呼悼マシイ哉。然リト雖人生何處ニカ死ナカラン、無常流轉ノ相ヲ觀スレハ、巨人長逝ノ愁嘆ニモ亦英魂永ヘニ宇內ニ在ツテ彝倫ヲ叙スルノ不滅ヲ思フ。

蓋シ貴下生涯ノ積德大業悉ク開華結實シ、積善ノ門ニ禎福集マリ、德澤洽クシテ鄉黨愈〻惠浴ニ謳歌スルモノアラン。嗚呼會長今ヤ幽明遠ク境ヲ隔ツレトモ偉績此ノ地ニ顯彰シ、感染感孚銘々ノ中ニ在リ、夫レ權ヲ弄シ富ヲ恣ニスル者ハ尠カラスト雖、人格高邁ニシテ德風ヲ後昆ニ仰カル、者ハ罕ナリ、我カ會長ハ洵ニ道義實踐ノ龜鑑ヲ垂レ無言ノ裡ニ會員ヲシテ感佩興起セシムト謂フ可キ也。

玆ニ永訣ニ方リ彼此相思ヘハ感慨無量都ヘテハ夢ノ如ク天地茫々問フ可カラス、仰ケハ溫顏前ニ映シ追憶哀惜ノ涙胸ニ滲ミ哀悼ノ感極マリテ言フ所ヲ知ラス、タヽ偏ヘニ敬弔ノ誠款ヲ捧ケテ御冥福ヲ祈リ奉ル。仰キ希クハ來リ饗ケヨ。

○東海商工會議所聯合會弔辭

東海商工會議所々屬清水商工會議所會頭鈴木與平君病改マリテ溘焉トシテ長逝セラル、寔ニ痛惜ノ極ミナリ。惟フニ清水市ニ於ケル君カ功績ノ偉

大ナルハ多言ヲ要セサル所ニシテ、當市ノ市政經濟ヲ始メ幾多ノ機構施設一ツトシテ君ノ力ニ俟タサルモノナク、接スル者何レモ君カ溫厚ナル人格、高邁ナル識見ニ親和敬服セサルモノナシ、昭和五年清水商工會議所ノ創設ハ君ノ盡瘁ニ負フ所多大ニシテ、初代以來會頭トシテ鋭意其ノ職ニ遵シ衆望ヲ一身ニ擔ヒテ今日ニ及ヘリ。曩ニ大患克服ノ直後推サレテ貴族院議員ニ當選シ其ノ活躍ハ愈〻廣汎ニ聲望倍〻重キヲ加ヘムトスルノ秋、突如トシテ訃報ニ接シ驚愕哀悼言フ所ヲ知ラス、君齡未タ耳順ヲ越エス、人生ノ精華寧ロ君ノ今後ニ待ツヘキモノ多カリシニ測ラサリキ、茲ニ幽明相隔テ君ノ溫容ヲ偲ハントハ、本日市葬ノ盛儀ニ列リ恭シク英靈ヲ拜シ冥福ヲ祈ル。

○貴族院研究會弔辭

貴族院議員鈴木與平君ハ夙ニ產業ノ振興ニ盡瘁シ地方自治ノ發達ニ力ヲ効サル、又曩ニ貴族院ニ列シ國政ニ參與セラル、ニ至リ籍ヲ當研究會ニ置カル、本會ハ今後君ニ期待スル所大ナルモノアリシニ今ヤ溘焉トシテ長逝セラル、洵ニ哀悼ノ至リニ堪ヘス、茲ニ恭シク弔辭ヲ呈ス。

○政友會縣下代議士代表弔辭

貴族院議員從六位鈴木與平君昨秋來東京聖路加病院ニ在リ、加療之レ努メタルモ遂ニ起タス、嗚呼哀シイ哉。君カ實業界ニ於ケル巨大ナル足跡ニ付テハ語ルニ別ニ人アリ、不肖ハ專ラ政界ニ於ケル君ヲ憶フ。君我カ黨ニ所屬シテ屢〻安倍郡又ハ清水市ヨリ推サレテ靜岡縣會議員トナリ、昭和五年十一月ニハ衆望ヲ擔ウテ縣會議長ノ榮職ニ就キタリ、別ニ大正十三年清水市制施行セラル、ヤ市會議員市會議長トナリ生涯之ヲ終始シタリ、其ノ間君カ縣政市政ニ致シタル功績ハ最高ノ頌詞ヲ以テスルモヨク盡ストコロニ非ス、曩ニ屢〻功勞者トシテ表彰ヲ受ケラレタル洵ニ理ナリ、而シテ其黨內ニアルヤ重厚ノ大器、熱心黨務ニ斡旋シ黨員悅服ノ中心タリ、茲ヲ以テ昨年九月貴族院議員改選ノ事アルヤ推サレテ立法府ニ列シタルニ今ヤ亡シ、

獨リ我黨ノ爲ニ歎惜スヘキノミナランヤ、寔ニ刻下重大時局下ノ一大痛恨事タリ。嗚呼哀哉。然リト雖君ノ功業ハ炳乎タリ、乃チ清水市、市葬ノ禮ヲ以テ君ヲ葬ル亦以テ瞑スヘキナリ、不肖本日葬ニ會シ、悲痛哀哭言フ所ヲ知ラス、蕪辭敬弔ノ意ヲ表スルノミ。

○全國輸出罐詰業水產組合聯合會長弔辭

謹ンテ、故貴族院議員鈴木與平君ノ靈位ニ白ス。君ハ靜岡縣會議長及清水市會議長トシテ多年地方自治ニ貢献セラレ又商工業界ニ君臨シテ其ノ名聲東海ニ冠絕シタリ、君ハ罐詰事業カ外貨獲得ノ國策達成上最モ有益有望ナルヲ認ムルヤ率先シテ罐詰事業ニ着手シ粉骨碎心シテ之カ向上發展ニ努メ、日本鮪類罐詰業水產組合及其ノ共販會社ノ創立ヨリ解散ニ至ルマテ組合長及社長ニ就任シテ練達堪能ノ手腕ヲ揮ヒタリ、鮪罐詰業今日ノ隆昌ヲ招來シタルハ全ク君カ不滅ノ功績ト稱スルモ過褒ニアラサルヘシ。鮪油漬罐詰ノ對米輸出ニツキ貿易上ノ障害勃發スルヤ昭和九年代表ノ一員トシテ渡米シ、折衝能ク努メ之カ輸出ノ基礎ヲ確立シタルハ業界衆知ノ事實ニシテ又特筆スヘキ君カ功績ノ一ナリ、後チ全國輸出罐詰業水產組合聯合會ノ設置セラル、ヤ鮪罐詰業界ヲ代表シテ評議員ニ選任セラレ、愈〻圓熟セル人格手腕ヲ以テ組合ノ指導ト經營ニ貢献スルトコロアラントシタルニ、天藉スニ壽ヲ以テセス溘焉トシテ君ハ白玉樓中ニ召サレ了ンヌ。顧レハ第二次世界大戰ノ勃發以來四海騷然鼎沸ノ如ク、我カ罐詰ノ海外市場殆ント戰禍ノ中ニ沈ミ貿易ノ前途益〻多難ニシテ君ノ抱負經綸ニ俟ツトコロ愈〻多カラントスルニ當リ君ノ長逝ヲ見タルハ我カ罐詰業界ノ不幸誠ニ大ナリト言フヘシ。惟フニ君ハ資性明敏敦厚ニシテ自治、商工適クトシテ可ナラサルトコロナク識見手腕又衆知ヲ拔キ罐詰業界不出世ノ師表トシテ我等ノ敬仰措カサルトコロナリ。今ヤ空シク幽明ヲ隔テ再ヒ君ノ謦咳ニ接スルヲ得ス、嗚呼悲シイ哉、聊カ蕪辭ヲツラネテ弔辭トナス。

○日本郵船株式會社長弔辭

維時昭和十五年五月十二日、貴族院議員從六位鈴木與平君ノ靈ニ告ク。君鈴與商店主トシテ大正九年十二月當清水港ニ於ケル日本郵船株式會社ノ代理店業務ヲ引受ケラレ爾來今日ニ至ル迄二十有餘年、清水港ト世界主要各地間ノ貿易ニ盡瘁セラレ、當社ノ各航路カ殆ト例外無ク當港ニ寄港スルニ至リタル事一ニ君カ努力ノ結晶ナリ、又此ノ間清水港ノ改善發展ニ絶大ノ努力ヲ拂ハレ清水港今日ノ大ヲ致サレタル功績洵ニ大ナリト稱スヘシ。時勢國情更ニ君カ双肩ニ負フヘキモノ多キ秋不幸二豎ノ冒ス所トナリ、療養努メラレシモ其ノ効ナク遂ニ昭和十五年五月二日溘焉トシテ逝去セラル、長恨何ニ譬ヘン、噫悲哉。サレト君カ生前ノ功ヤ永劫記シテ忘レサル所、君以テ瞑スヘシ。本日清水市々葬ヲ營マル、ニ當リ聊カ蕪辭ヲ連ネ以テ弔辭トナス、庶幾ハ在天ノ靈來リ饗ケヨ。

○靜岡三十五銀行頭取弔辭

本行取締役從六位鈴木與平君、疾ヒヲ得テ竟ニ起タス、本日其ノ斂葬ノ式ヲ行ハル、哀傷曷ソ勝ヘン。君ハ大正十年本行ノ前身タル株式會社三十五銀行監査役ニ擧ケラレ同十五年取締役ニ當選シ、昭和十二年靜岡銀行ト合併設立セル本行ノ取締役ニ選ハレテ今日ニ至レリ。君夙ニ本縣ノ產業、金融、政治ノ各般ニ力ヲ致シ其ノ經營ノ事業亦十指ニ餘リテ鄕里ノ繁榮ヲ援ク、清水市ノ今日ノ隆興ハ君與ツテ力アリ。資性明敏ニシテ周密加フルニ溫厚謙讓ヲ以テス。適所ニ人材ヲ配シテ是ヲ信賴シ、熟慮シテ是ナリト信スレハ斷行シテ退カス、茲ヲ以テ其ノ事業皆良好ノ成績ヲ收ム、不肖君ト知遇既ニ二十有餘年、齡ヲ以テスレハ一日ノ長アリト雖其ノ高邁ナル識見ト卓絶セル抱負トハ不肖ヲ啓發シ本行ノ指針タルコト多ク、永ク其ノ溫容ニ接シ其ノ高見ヲ聽カンコトヲ冀ヘリ、圖ラサリキ一旦ノ二豎ハ君ヲ黃泉ニ拉シ去ツテ復語ルノ期無カラントハ、ソレ人生死ヨリ悲シムヘキハ莫ク死ハ前途爲スアル士ヨリ惜シムヘキハ莫シ、況ヤ聖戰第四年ニ入リテ國家愈〻多事、人材ヲ要スルコト最モ急ナル秋ニ於テヲヤ。窓外ノ新綠生々ノ色ヲ成セトモ君再ヒ還ラス、噫悲夫、茲ニ罔極ノ悲痛ヲ一篇ノ辭ニ托シ虔シミテ

尊靈ニ捧ク。

○如水會靜岡縣支部弔辭

貴族院議員鈴木與平氏逝ク、噫悲シイ哉。氏ハ資性溫厚ニシテ謙讓ノ德高ク、普ク世人ノ信望ヲ擔フトトモニ思慮慧敏ニシテ經綸ノ才ニ富ミ、其ノ行フ所一トシテ可ナラサルハ無シ、寔ニ現代稀ニ見ル人材ニシテ氏ノ存在コソ實ニ吾等一萬同窓ノ誇トスル所ナリ。氏ハ明治三十九年母校東京高等商業學校專攻部ヲ優秀ナル成績ヲ以テ卒業サレ其ノ卓絕セル才能ハ終ニ鈴與商店ヲシテ今日ノ大ヲナサシメタルノミナラズ其ノ他數十會社ノ社長重役タルノ外政治ニ產業ニ敎育ニ軍事後援ニ各種團體ノ重鎭トシテ社會的ノ重責ヲ負ヒ熱誠以テ事ニ當リ、其ノ神算一トシテ謬ル無ク功績ノ偉大ナル寔ニ其ノ比ヲ見サル所ナリ。殊ニ氏ノ情誼溢ル、犧牲的精神ニ吾等ノ常ニ等シク崇拜敬慕スル所ニシテ、顧レハ氏ノ社會的生活ハ眞ニ一貫セル尊キ奉仕ノ生涯トモ稱スヘキナリ。聖戰下時局多端ナル秋ニ當リ、氏ノ如キ德能兼備卓絕セル偉材ノ寄與ニ俟ツ所愈〻多ク益〻切ナルヲ惟フ。然ルニ天時ヲ藉サス、今ヤ溘然トシテ逝ク、其ノ國家的損失ノ大ナル事痛惜措ク能ハサル所ナルト共ニ再ヒ氏ノ英姿ニ見エ溫容ニ接スル能ハサルヲ思フ時萬感胸ニ迫リ暗涙自ラ制シ難シ、噫悲シイ哉、然リト雖、氏ノ遺德ハ炳乎トシテ永遠ニ生キ其ノ遺業ハ隆々トシテ無窮ニ榮ユルヲ信ズ、然ラハ則チ亦瞑シテ可ナリト言フヘシ。冀クハ在天ノ英靈來リ饗ケラレン事ヲ。

○横濱生糸問屋業組合長弔辭

謹ンテ、故貴族院議員從六位鈴木與平君ノ靈前ニ禀ス。顧ルニ大正十二年九月一日ノ大震災ニ因リ横濱港ハ一瞬ニシテ壞滅烏有ニ歸シ、開港以來六十年ノ久シキ先人苦鬪ノ跡慘タル焦土ト化シ、市民マタ死線ニ彷徨シ巨億ノ貿易地ヲ拂ツテ杜絕スルニ至レリ。此ニ於テ我等業者ハ生糸貿易ノ重要性ニ鑑ミ之カ復興ハ邦家ノ爲一日モ忽ニスヘカラサルヲ痛感シ、横濱貿易復興會ヲ組織シ一意生糸貿易ノ再興ニ努力シ、餘燼未タ收ラサル九月十

七日ニ生糸市場ヲ再開スルニ至レリト雖、當時鐵道道路ノ破壞甚シク爲ニ關西信州地方ヨリノ出荷不可能ノ狀態ナリシヲ以テ清水港ニ横濱貿易復興會ノ出張所ヲ設置シ政府援助ノ下ニ海路輸送ノ計畫ヲ樹ツルニ至レリ。此ノ時ニ當リ君ハ深ク我等カ微衷ヲ掬ミ私財ヲ投シテ事務所ノ設備ヲ整ヘ、身ヲ挺シテ生糸ノ海路輸送ニ戮力セラレ克ク所期ノ目的ヲ達成シ以テ生糸貿易ノ復興ヲ扶掖セラル、所蓋シ尠カラス。之レ偏ヘニ君カ道義ヲ重ンシ報公ヲ念トセラルル崇高ナル精神ノ發露ト謂フヘク、爾來星移リ年革ルコト茲ニ十有八年、我等業者ノ夢寐モ忘ル、能ハサル所ナルト共ニ君カ高風ハ恒ニ我等ノ瞻仰思慕シテ止マサル所ナリシナリ。然ルニ卒然トシテ其ノ訃ニ接ス、誠ニ哀悼痛惜ノ情ニ堪ヘス、此ニ恭シク弔詞ヲ呈ス。在天ノ英靈冀クハ來リ享ケヨ。

○靜岡地方裁判所檢事正弔辭

貴族院議員從六位鈴木與平君病革マリテ竟ニ立タス、此月二日天曉ニシテ巨星殞ツ悲イ哉。明治十六年梅白キ候靈峰芙蓉ノ南、駿河灣水清キ處、騏麟兒生ル是君也。無碧夙ニ異彩アリ、長シテ笈ヲ東都ニ負ヒ若冠才ニ齒ヲ加ヘテ蚤ク商業最高ノ學業成ル、乃チ鄕ニ還リテ實業界ニ入リ、次テ地方政界ニ出ツ、爾來三十三春秋ヲ閱シ其ノ携ハル所政治ハ地方中央ヲ貫キテ上院ニ臻リ、實業ハ水陸ヲ兼ネテ所有ル部門ニ涉ル、其ノ間更ニ教育ニ社會救恤司法保護司法調停ニ在鄕軍務國防稅政ニ及ヒテ事業ヲ創ムルヤ君ヲ要シ其ノ成ルヤ君ニ俟ツ、厥ノ功績多キニ過キテ擧ケテ算フルニ勝ヘス、厥ノ德澤世ノ耳目ニ熟シテ敢テ讃スルヲ須キス。故ニ各種ノ表彰ヲ享クルコト頻ニシテ十指ヲ勞セントス、殊ニ昭和五年五月二十九日、聖上陛下、靜岡縣下行幸ノ御砌リ畏クモ御陪食ヲ仰附ケラレ處士トシテ至上ノ光榮ヲ辱ウシタルノミナラス特旨ヲ以テ位記追賜ノ恩命ヲ拜セリ。今君溘焉トシテ逝ク、人之ヲ聞イテ止タ一家ノ凶トナサス鄕黨色ヲ失ツテ君カ喪ニ趁リ清水市葬ノ禮ヲ執リテ英靈ヲ弔ヒ慰メントス、人生古來不壞ノ命ナシ、史乘東西不朽ノ名有リ、男兒ノ終始卽チ君カ如クンハ惟レ是レ大丈夫ノ生涯ヲ完

ウシタルニ庶シ、然リ正ニ之ヲ全ウシタルモノナリ、君也タ以テ瞑スルニ足ラスヤ、茲ニ恭シク柩前ニ拜跪シテ流涕永訣ノ禱ヲ捧ク、冀クハ芳魂來リ此衷ヲ饗ケヨ。

○靜岡縣國防協會長弔辭

貴族院議員前清水市會議長清水商工會議所會頭從六位鈴木與平君長逝セラル噫君本會參與トシテ創立以來翼助輔援頗ル饒多ニシテ謝悃洵ニ措ク能ハサル所ナリキ、今ヤ支那事變ハ新中央政府ノ成立ヲ契機トシテ解決ノ眞難關ニ入リ歐洲戰倍〻擴大シテ世界機構ノ大變轉現出セントス、寔ニ我カ肇國精神顯揚ノ爲國防力擴充ノ一途ニ邁進シ本會ノ活躍更ニ緊切ヲ要スルノ秋二豎不仁無情、遂ニ斯ノ人ヲ奪フ、奚ソ痛惜ニ勝ヘン、茲ニ清水市葬ニ方リ恭シク饌ヲ供ヘ虔ミテ哀悼ノ誠ヲ輸ス、尚クハ享ケヨ。

○靜岡縣教育會長弔辭

故清水市教育會長貴族院議員從六位鈴木與平君ノ英靈ニ白ス。君資性溫厚篤實ニシテ謙讓品行方正ニシテ孝心敦シ、明治三十九年東京高等商業學校ヲ卒業スルヤ先代ノ遺業ヲ踏襲シテ鋭意力ヲ海運業ノ發展海外貿易ノ振興ニ致シ、其ノ自ラ經營スル株式會社鈴與商店ヲ始メ清水商工會議所、靜岡縣東亜輸出組合其ノ他各種四十有餘ノ會社組合ノ要職ニ關與シテ參畫經營スルコト多年、其ノ企畫スルヤ透徹セル頭腦ヲ以テヨク時代ニ先驅シ其ノ經營スルヤ孜々營々必ス完遂ノ美ヲ收ム、寔ニ業界稀ニ見ルノ偉材ニシテ其ノ今日ノ大ヲ致セルモノマタ宜ナリト謂フヘシ、而シテ君マタ常ニ地方自治ノ振興憲政ノ刷新ニ意ヲ用ヒ或ハ市會議員トシテ或ハ縣會議員トシテ將又晩年ハ貴族院議員トシテ國家公共ノ爲ニ盡瘁セラル、ト共ニ他面教育ノ事業ニ關心ヲ持シ其ノ高邁ナル識見ト謙讓ニシテ高潔ナル人格トヲ以テ或ハ清水市教育會長ニ或ハ靜岡縣育英會、國民精神總動員運動、思想對策研究會等ノ精神的事業ニ關與シテ貢献セラル、所多ク、特ニ清水市教育會今日ノ隆運ヲ致セルモノ君ノ力ニ俟ツモノ多大ナリト謂フヘシ。

誠ニ八面玲瓏玉ノ如キ君カ人格ハ產業經濟政治敎育ノ各般ニ亙リテ其ノ光ヲ放チ功績燦トシテ岳南三州ニ輝ク、思フニ君カ今日ノ大ヲナセルモノ一ニ其ノ己レヲ空シウシテ他ニ盡スノ眞情ト事業ヲ通シテ國家社會ニ奉仕スルノ信念ニ基クモノニシテ、眞ニ吾人ノ龜鑑ト謂フヘシ。然ルニ天何ソ無情ナル、空シク此ノ巨星ヲ奪フ、嗚呼悼シイ哉。

本日斂葬ノ儀ニ列シ君カ生前ノ功勞ヲ偲ヒ涙新ニシテ英姿眼前ニ髣髴ス、茲ニ恭シク哀悼ノ誠意ヲ捧ク、冀クハ來リ饗ケヨ。

○鈴與商店並關係會社代表弔辭

本日社長殿市葬ノ御盛儀ニ方リ株式會社鈴與商店ヲ始メ關係會社ヲ代表シ謹ンテ御靈前ニ申上ケマス、昨年御大患以來奥樣始メ御親戚ノ方々ノ並々ナラヌ御心遣ヒハ申シ上クルマテモナク、吾等社長ノ傘下ニ生ヲ享ケシ者等シク熱誠コメテ御快癒ノ速ヤカナランコトヲ祈願致シマシタノニ遂ニ其ノ甲斐モ無ク、人事ノ悉クヲ盡シ來リテ天命ノ如何トモスヘカラサル今日此ノ時ニ際會シマシタ事ハ何トイフ人生ノ恨事テアリマセウ。悲シミノ極痛マシノ果申シ上クル言葉モ御座イマセン、思ヘハ五十八年ニ亙ル社長殿ノ御生涯ハ「至誠」ニ始マリ「奉公ノ誠ヲ致ス」ノ一事ニ盡キテ居ラレタ樣ニ思ハレマス、人ノ爲メ國ノ爲メトアラハ其ノ全身全靈ヲ打チ込ンテ御盡シニナリ、何事モ大乘的見地ヨリ時局ヲ達觀セラレテ文字通リ滅私奉公ノ御生涯テアラセラレマシタ。社長殿ノ献身的ナル赤誠ハ產業ニ自治ニ軍事ニ或ハ敎育ニ其ノ他數々ノ事業ノ上ニ偉大ナル光明トナリ指針トナツテ終始セラレタノテアリマス。其ノ幾多ノ功績ハ畏クモ天聽ニ達シ特旨敍位ノ御沙汰ヲ拜スル御鴻恩ニ浴サレ、御一門ノ光榮吾等ノ感激譬フル術モ御座イマセン。又本日ノ御葬儀ニ當リ近キハ目ノ邊リヨリ遠キハ遙カニ聞キ傳ヘテ各地ヨリ馳セ集マラレタ幾千ノ方々ノ熱誠溢ル、敬虔ナル有樣ニモ窺ハレ今更ニ其ノ御人格ノ高キヲ偲フ次第テ御座イマス。

內ニアリテハ寸暇ナキ御多忙ノ中ヲ吾等未熟ナル者ニ對シ溫容ソノモノノ如ク誠ニ親切ニ丁寧ニ御指導ヲ賜ハリ、特ニ人格ノ向上品性ノ陶冶ト云

フ方面ニハ格別ノ御心遣ヒヲセラレ、其ノ御信條トセラレマシタ共生ノ精神知恩報恩ノ心構ヲ隨時隨所ニ身ヲ以テ御導キヲ賜ハリマシタ。洵ニ仁愛ニシテ謹嚴謙讓ニシテ寛宏、慈父ト云フヘク餘リニモ尊ク有難イ御日常テ御座イマシタ。

思ヘハ吾々ハ實ニ長イ間格別ノ厚イ高恩ニ浴シマシタ、ソレニモ拘ラス御報ヒスル事ノアマリニモ尠カツタ事ヲ深ク深ク御詫ヒ申シ上ケル次第テ御座イマス。近年其ノ卓拔セル御人格ト非凡ナル識見トヲ以テ社會ノ各方面ニ活躍セラル、有樣ハ全ク人間業トモ思ハレヌ其ノ抱負經綸ハ吾々ノ窺ヒ知リ得ヌ程高邁ニシテ深遠ナルモノテアリマシタ。思フニ今回ノ御大患モ寧日ナキ其ノ御活動ノタメニモヨルナランカト潛ニ拜察シ哀惜別離ノ情ニ堪ヘサル次第テ御座イマス。サリナカラ御家門ノ御繁榮社運ノ隆昌共ニ基礎既ニ堅ク其ノ御高邁ノ資ヲ享ケ嗣カレマシタ一郎樣始メ御子息樣方ノ御成人セラル、アリ吾等亦及ハスナカラ御家門ヲ中心ニ一致協力飽ク迄結束ヲ固クシテ在リシ日ノ御教訓御遺志ヲ體シ益〻業務ニ精勵シ以テ御高恩ニ酬ユル覺悟デ御座イマス、在天ノ英靈何卒御心安ラカニ御冥福アラセラレンコトヲ一同ト共ニ謹ンテ御祈リ申シ上ケ御別レノ詞ト致シマス。

第十三章　逸話

一、公明正大の戒め

多年愛顧を蒙つて居る某自動車屋が若い頃東京のある邸宅から賣りに出た自動車を買はうとした。價格は六千圓で相當の逸品でもあり直ぐ七千五百圓位には賣れる見込みであつた。然し之を手に入れるには別に五百圓を邸宅の運轉手に握らせなくてはならない。而し澤山の所持金が無いので思案の末、日頃特別厄介になつて居る氏に相談を掛けた。ところが卽座に强く斷られ「人間は何でも公明正大でなければならない。勞力に對する正當な報酬は受けてよいが、そんな人をぺてんにかける樣な話は止めた方がよい。人は正しい道を歩むべきだ」と戒めて尠しも取合はなかつた。

二、來客の氣持を思ふ

商店の玄關に引續き來客があり而も一々丁寧に誰にも同樣な態度で應接されるので或人が「旦那さん、さう一々面會なさらずにお斷りになつたら如何です」と申したところ「いや君、面會に來て斷られた人の心持を考へて見給へ、どんな方でも鈴木與平に逢ひ度い、賴み度いと言つて折角來られるのに、とても僕には斷れないよ」と語られた。

三、冗談を言つた友人恐縮す

或日子供時代からの某友人が冗談に「君はそんなに偉くなつたが、偉い人は大抵二號を持つて居るものだが君にそれがあるか無いかを聞き度い。又奧樣は頗る質素だが着物があるか無いか」とたづねた。氏はにこ〳〵と笑つて居られたが、其の後程經て友人に、平然と眞面目な態度で「君、過日の着物の話について家內に聞いて見たが、禮服はあるさうだから心配しなくてもよいよ」と

申されたので、友人はすつかり恐縮してしまつた。

四、斷じて誘惑を排す

日頃宴會に出席する機會は多いし、交際の爲には斗酒尚辭せずで、夜半に及ぶことが屢〻あつたから色々の人達が何とかして美妓を侍らせようと計畫したが、飲めば飲む程謹嚴となるので遂に少しもその効を奏せず、藝者達も巨人の寵愛を受けようと方策を講じて見たが、どうしても其の手に乘らなかつた。縣外遠く某所で、或重要問題の解決後關係者と晩餐を共にした。慰勞宴の果てる頃美妓に言ひふくめて氏を獨り殘し、他の者は夫々欲する所に遊びに行つてしまつた。而し謹直な氏は他の人達が迎へに來るまで膝も崩さず端坐して眞面目に話をして居られたので、皆の者は飽くまで氏の愼獨恭謹なのに衷心より恐れ入つたとの事である。

五、支那語講習の先鞭

日露戰役直後の明治三十九年、東京の遊學から清水に歸ると、將來日支提携對支貿易の重大性を認めて、先づ鄕土の人達に支那語を知らしめようと考へられ、清水幼稚園を會場として自らその講習會を開かれた。當時としては實に珍しい講習で、その先見の明には何人も敬服せざるを得なかつた。

六、木炭車を眞先に使用す

昭和十三年、ガソリン統制に依る自動車界の大變革期が到來した。そこで氏は早速自家用車を代用燃料車に改造しようと言はれた。運轉手が一寸考へて「石油自動車にしては如何ですか」と聞いたところ言下に「それも今に統制品になり必ず思ふ樣に使用出來なくなる」と言つて木炭自動車に改造を命ぜられた。蓋し縣下では之が最初の木炭自動車であつた。

七、寛容店員を愛す

料亭に店員が遊びに來た事を或人が話すと、氏はその人に向つて「鈴與には

そんな店員は居ないよ」と言つて店員を庇護した。

平素上京は午前六時二十分清水發急行、歸着は午後十時五十分か十一時四十六分の列車に定つて居た。運轉手が偶に寢過ぎて豫定の時間に停車場に迎へない事があると翌朝になつて笑ひながら「昨夜は枕時計が故障かな」などと言つて更に咎めなかつた。或時靜岡よりの同乘の客人が「オイ運チャン運チャン僕の家は其處だから止めて呉れ」と呼んだ。すると氏は靜かに「家の運轉手は山本といふ者です」と言つたので、呼んだ人も心を咎めて愧ぢ入つたといふことである。

八、雨中に禮服で魚釣

今を時めく松岡外相が嘗て清水市で大講演をした後に、港の靑波に釣魚の舟を浮べられた。その際氏は滿腔の敬意を表して興趣を共にすべく同船したが折惡しく降雨となつた。松岡氏は無心に糸を垂れて頻りに魚の引くを樂しまれたので、氏はフロックコートのまゝ濡れるに委せて偸樂に時を過ごし心から接伴された。日頃決して私の逸樂に耽らぬ氏が、人の爲社會上の事に誠心誠意を竭される姿に、側の者は深く感に打たれるのであつた。

九、無理はせぬもの

市政上のある重大問題に直面した時、急進分子が頗る過激な議論を吐くのを聞いて一夜酒宴の席上言葉和らかに、

「曲折のある問題を解決する場合は、その間に介在する障碍を無理に排除して高壓に決めてしまつてはならない。（盃の並んでゐるのを指して）此の處を突き進んでも進めないことは無いが、その爲に必ず盃は倒れ、あたりは散亂して面白くない結果となるから、盃の片付くのを待つて進めば自ら無理もなく解決するものだ」と言つて諷刺されたといふ事である。

十、優情に老妓の感激

或年二人の老妓が廢業する事になつた。朋輩達は何とかして相當の金を

集め、二人の餘生を安心させ度いと親切に方策を廻らした結果、送別の寄附帳を作り、多年顔馴染の客に寄附を仰ぐことに相談が纏つた。そこで從來恩顧を受けて居る氏に先づ懇願すると、「それは二人の爲に大へん結構な事だ、さういふ友情の溢れた企てなら私が第一に筆を入れてあげよう」と快く承諾された爲に、他の方面も話が速く意外に多額の金が集つた。二人の老妓は涙を流して心から芳情を感謝し、關係した朋輩連も今更の樣にその厚い優情に感激して、一同生涯大恩を忘れまいと誓ひ合つたのであつた。

十一、仁情漲る軍刀

日頃鈴木家の恩義を受けた某婦人の一人息子が支那事變の爲、聖戰參加の大命を拜した息子は、野戰に活躍する武人の魂として一振の軍刀を欲しくて堪らなかつたが、どうしても手に入らず、本人の無念は申す迄もなく母の氣持も堪へられなかつた。同母は何とかしてやり度いものと思案の末、氏の溫情に縋らうと心を定め早速その事情を訴へると、之を聞いた氏は「よし、それは氣の毒だ、出征兵としてさぞ殘念な事であらう」と快く引受けてやつた。數日後に、祝出征の歡送旗と共に届けられた軍刀は稀代の業物であり、立派に砥ぎすまされて軍刀に作られてあつた。母親と息子の欣喜雀躍は譬へやうも無く感泣に咽ぶのみであつた。かくて應召兵は勇躍征途に上つたのであるが、溫情溢るゝ氏は、その出立の早朝に態〻宅を訪れて壯途を祝し、驛頭まで見送られたのである。

十二、信じて人を生かす

士官學校から更に進學し中途で退官して滿鐵に入り相當の地位まで昇つたが、子も無く愛妻にも死別して酒に身を持ち崩し、遂に放浪生活に入つて六十餘歳となり、東海道の一宿で僅かの酒食にも無錢飲食に問はれて前科者の汚名を着た同情すべき不幸な老人があつた。當時の清水署長は氏に實情を打明けてその救濟を依頼したので氏は早速之を引受け、折柄靜岡に開催中の國家總動員法の講習會に此の老人を送り、感想を認めさせたところ、實に堂々

として立派なものであつたので、一切の過去を咎めず、罪惡を問はず、たゞ深く信じ且つ同情して之を雇ひ克く庇護を與へられた爲に、此の天涯賴る邊なき老人は今更人の眞情に感激し、爾來着實眞摯に職場を守り、安穩に餘生を送ることが出來る樣になつた。

十三、僚友の成績に雀躍

靜岡中學校二年生の頃の話である。日頃特別仲好しの加藤某が學期試驗終了後の或る日、野球が得意なので旺んに怪腕を振つてゐると、野球場に突然大聲をあげて叫びながら側へ寄つて來る少年があつた。見れば澤野少年で額に汗して而も喜色滿面に溢れて居るから、加藤少年は奇異の眼を盯るとその瞬間に「加藤君素敵だぜ」と言ふので「何が」と問ひ返すと「君、二番だぞ、お芽出度う」と頻りに繰り返すのであつた。當時學校では學期毎に奬勵のために生徒の成績を大黑板に掲示して公表したものであるが、此の發表を見るや否や自分の成績はさて置き、先づ以て親友の優秀な成績を我が事の樣に喜び、欣喜雀躍して大急ぎに之を告げたその純眞無垢な、他の喜びを己が喜びとする心情は實に床しさを覺えさせるものがある。

十四、不德義には斷乎讓らず

大正年間に、清水港公益事業に聯關する契約不履行者に對し徹底的に難詰された事があつた。相手は時の政治家高野某(假名)で、平素格別恩惠を蒙つて居ながら氏に對して約束を履まず、表面受諾を裝ひ而も再三の要求に接しながら言を左右にして荏苒之を履行しない爲に、氏に非常な迷惑を及ぼし信用問題まで惹き起した。事是に到つては寬容も度があるものと氏は遂に默するに忍びず、舊友加藤某の應援を得て高野に對する契約不履行難詰の火蓋を切り、斯くて清水町常磐ホテルの一室で會見し論談數刻、その不德義を難詰して一歩も讓らなかつたので、彼も終に其の非を自覺し、陳謝再拜して漸く事件は和解を告げることになつた。この日歸宅の途次喜色滿面に湛へて「實に愉快だ、正義は最後の勝利だ、是で胸が透いた」と言つて再三友人の肩を敲いたと

いふことである。

十五、人材を養ふは我が義務なり

昭和十四年九月の末貴族院議員當選の披露をする爲に、貴顯紳士舊友知己を靜岡の浮月樓に招待して盛宴を催されたが、その夜、座に居殘つた一老紳士は對談中偶〻育英の事に及ぶと、眞面目な態度で「私の長男もお蔭で靜高を今春卒業し京大に入學することが出來た。然し家に資力が乏しいので心配して居る。聞けば貴下は育英事業に格別志が厚いとの事、幸ひ吾子の爲に三年間の月謝を惠まれるならば如何程助かるか知れない」と切なる希望を述べた。氏は快い顏に友情を漲らし「その事はいと易い話だ、天下に人材を養ふは吾人の義務である。君の喜びは吾が喜びである。夙にその言葉を聞きたかつた、確かにそれは引き受けたから御安心下さい」と懇ろに答へられたので、老紳士は全く氏の眞情に感極まり落涙滂沱、心より感謝して席を辭したとのことである。

十六、僚友の忠言を喜ぶ

聖路加病院に入院加療中の或日、舊友が見舞に訪れて靜かに氏に說いて「君は近く病魔を治して退院したなら、是非とも一切の用務を擲つて今後は悠々自適して貰ひ度い、令嗣も立派に成人のことだから何の憂ひも無い、庶幾くは鈴與の大檀那で座布團の上に安居し餘生を多幸に送つて欲しい、吾等の衷心より望む所である」と眞情を籠めて話した。氏はこの時溫顏に微笑を湛へて力强く「親切を深く感謝する、若し幸ひ病を癒せば必ず君の忠言に從ふ事にしよう」と答へて共に喜び合ふのであつた。

十七、敢へて不便を忍ぶ

鮪罐詰輸出量協定の重要使命を帶びて米國に渡られた時の事である。嗣子一郎氏を伴ひ西海岸よりニューヨークに趣き、日本人で五十餘歳になる某後家さんの經營して居る下宿屋に泊られた。ホテルとはいふものゝ隨分不

便に出來て居たが、その日本人の爲にと思つて態とそこに宿を取り、其の後長子をサンフランシスコまで送り、便利の所へ宿をかへる氣持で居られたが、同胞の爲になる考へから、やはりその宿に滯在することに決められた。故郷へ届いた當時の音信に「自分だけ不便を忍べば下宿屋の人もよからうし、あの日本人の爲にもなることだから元の不便な下宿に居る云々」とあつた。

十八、珍らしい作歌

日記はなるべく書かれたが繁忙の爲になか〳〵連續出來ないので、

元日や三日坊主が日記つけ

揮毫を頻りに人から依頼されても謙遜して容易に應諾せず或時の歌に、

悪筆に揮毫を強ひられ困りはて汗をかいたり恥をかいたり

物故市會議員の爲に自ら追弔法要を營んだ節の自筆の玉稿があつたが未だ探し當らない。奥様の記憶にさへこれだけで殘された作歌は珍らしい。

第十四章　追　憶

一、恩師の憶ひ出

武藏高等學校長　山本良吉氏　談

人物といひ、手腕といひ、資産といひ、申分のない鈴木君が、たゞに靜岡縣の鈴與たらずして天下の鈴木與平たられる日を樂みに待つて居たのに、突然としてその訃音を聞いた時には、一寸ボーッとした氣持になつた。實は私は同君とは久しく音信を交へ、又度々御厄介にはなつたが、親しい交をしたといふ程ではない。しかし同君は私の心の中には堅い核の樣になつて常に一種の光をもつて殘つて居た。私が五十年敎壇で相識つた人は實に何千人か數へることはできぬ。中には種々の關係で非常に親しくなつた人もあるが、鈴木君にはそんな關係はない。なくてしかもそれ等の人以上の感じを常に心中に

抱かしめる。それは全く君の人格の力によるのであるが、それをこゝで書いて見ようとしても、どうも描き出す事ができぬ。

私が靜岡中學校に奉職したのは明治三十年から三年間であつた。まだ二十七八歳ででもあつたらうか、故吉田良春校長が本校の方は自分で改良し得るが、寄宿舍となるとどうも校長の手ではできぬからとて、その任務で就職した。若氣の至りで、赴任匆々一氣に舍の慣習を改良せうとして種々急激な變化を行つた。その爲に舍では見苦しい事件を引起した。吉田校長の非常に注意深い處置によつて事なくすんだが、その事件の影響で、教室内に入つても私の心の中には一種のいやな氣持が滯つて居た。吉田校長が去られて故川田校長が來られた。今度は校長の人物について私が釋然たらざるものがあつた。それやこれやで、學校の一隅には私に餘り氣持よくないものがあつた。かゝる氣分の中で、當時三年級へ出ると、一人、身體の小さい、極めて怜悧さうに見えて、そして表情の極めて明朗な生徒が上席を占めて居る。頭がよいから、少しむづかしい事でも明瞭に說くと、直ぐ喜んで受け入れた表情をする。しかしその他の時は、小さい癖に、すました樣な、言つて見れば氣取つた樣な風をして居る。私は始めはその生徒の性質を判斷するのに少し惑つた。どうかした折に直接に話し合つた事があつた。さうすると誠に純良な優れた生徒である。その氣取つた樣な風をするのは、小さい體で上席を占めるための保護色であることがわかつた。私が彼に對する氣持態度も自然に變らざるを得なくなつた。これが後の鈴木與平君であり、その頃は何とか姓名が異つて居た。

靜岡は私には面白い所といふか、氣持よい處といふか、兎に角思殘りのした處である。私が靜岡中學校へ行つてまづした仕事は、かの寄宿生との衝突であつた。しかし衝突しても、譯がわかるとすぐ釋然とした氣持になる。當時寄宿で私と衝突した生徒は多く間もなく私と極めて親しい間柄になつた。その時に最も目ぼしい反對者であつた菊地とかいふ生徒も、後には度々訪問して來た。和泉惣一郎君が反對者であつたかどうかは知らぬが、表面はさう見えた。しかし後には無二の親友となり、死ぬる時まで私の事をいつて居ら

れたと聞いて實は涙が出た。今旭川に居られる鷲山醫學士の如きは、私が靜岡を去る時濱松附近まで送られた。先年旭川へ行き天外萬里での歡待を受けて、別れた弟に逢つた氣持がした。それ等の若い生徒の上に立つて隱れた指揮者は實に今の三橋四次郎君であつたとにらんで居るが、同君とは今も極めて親しい。同君の度々の外遊中必ず一度はどこからか繪葉書を贈られる。先年久しぶりで靜岡へ行つた時、車で全市を案内してくれたのも實は同君であつた。今でも汽車で靜岡縣を通ると、電柱一本一本が皆話しかけてくれる樣な氣持がする。鈴木君は寄宿にも居られず固より衝突などあつた事はないが、それ等の面白い人情の間にあつて、その人情の中心の星とも見られた一人は實に同君であつた。この文をかいて居ながらも、眼を閉ぢて當時淺間社前にあつた中學校を憶ふと、君の幼な顏がすつと現れて來る。その兩眼と吻には才氣が煥發して居る。

中學校に居た頃一夏を先代鈴與氏の海ぞひの離れに過した事がある。その後京都に轉任してからも一夏長女と共に同家には厄介になつた事がある。

その時君は高等商業の生徒であつたと思ふ。秋月致君と三人で宗教論が始つた。私は兩君とは宗教の立場が違ふので、話が合はぬ。鈴木君「それや信仰のない者にはわかりませぬ」といつたので私も話を止めた覺えがある。君は鋭い理智性をもつて居られたが、君の理智性は大たいのわかる先の見える理智性である。こゝに君の後の發展の原因があつたのではあるまいか。

靜岡高等學校の開校式に參列した時、君におねだりして御宅で泊めていただいた。式がすんでから君は市の附近を車で案内せられた。私が古い飲食物店に興味があるのを知つて、靜岡と江尻の中間邊かと思はれる、大福の樣な餅を賣る店へ入り、蜀山人の筆になつた判を取り出させて押させて下さつた。此の判は靜岡縣中で得た多くの判の中で今でも最も興味深いものである。それは蜀山人の筆も面白いが、君が多忙中にわざ〳〵あすこへ案内された氣持が、判の周圍にこびりついて居るためである。それから宇津谷峠へつれられて、君と須山君と三人で歩いて山崎闇齋の詩や廣重の繪で私の頭に殘つて居る十圍子屋を尋ねた。昔の繪にある十圍子はもう昔の物で、今はたゞそれ

を小さくして糸につないでまじなひにして居る小團子しかなかつたが、私の心は幾重にも滿足した。

その頃君の縣政上及び實業上の位地は既にでき上つて居て、君は立派な紳士であつた。たゞ私の頭には中學時代の君の容貌が殘つて居たせゐか、君の躰軀も非常に偉大になられ、格外に肥大して居られる樣に思はれ、或は仕事の關係で酒でも飲むのではあるまいか、かう太つては、それから病氣でも起りはせぬかと中心いたく心配して、君の健康を尋ねて見たが、餘り氣にはして居られなんだ。政黨などに關係する實業家はとかく酒と離れ難い。君の信仰が尙あるかどうか知らぬが、今少し細られる樣にと心の中では深く望んだ。しかし君の理智性を知悉して居る私は、それを口には出されなんだ。

その後縣からの依賴で靜岡に行つたことがある。その晩靜岡中學校の關係諸君から浮月に招かれた。始め三橋君と話して居ると、小ぜいな人が心安さうに「やあ暫くでした」といふ。一寸私にはわかりかねた。聲を落して「澤野ですよ」といはれたので、私の記憶は三十年前に飛び戻つた。私も思はず「澤野君」と叫んだ。君から今更澤野の舊姓を名のられる筈ではなかつたが、君の肥滿した容子が頭に入つて常に心配の種子となつて居た私には、昔の澤野時代と同じ、小さい恰好のよい姿を今の鈴與君とはどうしても思ひつかなかつたのである。この時私の積年の心配はさらりと晴れた。これなら君の健康も決して心配するには及ばぬと安心した。その晩色々な舊知の諸君と話したが、最も長く話したのは君と三橋君とであつた。政黨人たる兩君は私の前でも互に兩黨のひやかしを交換される。私は今更政黨の爭などするより、一つ靜岡縣全體をまとめて兩君で手を取つて働いてくれたらどうかといふ樣な話をした。君は小聲で、政黨なんかどうでもよいのですと笑つて居た。これが君の本音であつたらう。

この春君の死去を新聞電報で見た時、私はさては私の心配が事實となつたのかと實にがつかりした。君は縣政に於て相當の仕事をされた。實業家としては更に大きい働をせられた。しかしいづれも君の眞の人格の發動とは考へられぬ。これ等二者を超脱して更に天下の鈴與として働かれる時、始め

て君の眞人格が現れるべきであつたのに、それを見るに及ばずして長逝されたことは誠に殘念であつた。勿論君は政黨實業以外にも人知れず種々の善行を積まれた事は色々陰に伺つて居る。君の兩界に於ける發展そのものも勿論君の信仰、君の才力ならずではできぬ事であるから、君はそれを樂しみ、それに滿足して働かれたのであらう。靜岡縣下に君の世話になつた方は少くあるまい。それ等の方々が君の業、君の志の外君の精神をも受けついで働かれるならば、一の鈴木君は化して數千の鈴木君となつて君の長逝を懷うて心に念ずる事はこれだけである。（二六〇〇・八・二九）

二、學友の追憶

京城　秋月致氏談

靜岡中學にては常に首席を占めて居たが、殊に目立つたのは、氏のいつも悠悠たる態度で、平日も少しも勉强して居る樣子もなく、また試驗期日が切迫したからと云つて殆んど試驗勉强する模樣もなかつた。翌日試驗だと云つても悠々閑々たる態度でいつ試驗があるかと云ふ風であつた。然しいつも首席であつたのは寧ろ不思議な位で、恐らく學んだ事はその場で覺え忘れる事がなかつたのであらう。

それでは所謂秀才型と云ふのかと云ふと、決してさうではなかつた。おれは秀才だぞ、おれは優等生だぞと云ふ誇りは殆んど持たなかつたし、また表はさなかつた。其の一理由はあまり努力せずに優等の成績で居られたので、それがあまり當然また自然で「誇り」と云ふものゝ入り込む餘地がなかつたのではなかつたらうか。いつも普通の人の普通の態度で、平和な靜かな餘裕ある態度で學生生活を送つた。さうして社會生活も同樣此の學生生活の延長で悠々たる心境を持しての生活であつたと考へる。

靜岡中學を優等首席で卒業した時、何か家事上の都合で一時上級學校へ行く志を捨てようかとせられた。東京高等商業に入學の希望を持つて居られたが、それを捨てようかとせられた。そしていかにも殘念だがとの事であつた。その頃私は、金澤第四高等學校生徒であつたが、書面でその旨を、當時の靜

岡中學校長川田正徴先生(後の東京府立一中校長とし長く名校長とうたはれた)に訴へ、是非先生の御盡力で、その志が達せられるやうに願ひたいと申上げ、通太郎氏の兄上(保吉氏)が校長のもとに招かれ、懇談があり、結局通太郎氏は、やはり東京高等商業に入學する事となつた。(無試驗にて)

高商での成績も優秀であつたと思ふ。更に高商の專攻部に入り卒業、卒業論文を多忙だから私に清書してくれとの事で、氏の論文を私の惡筆で、清書？したやうな滑稽もあつた。

我々の時代に靜中水泳部が創始せられた。氏はその第一回から部員に加はつた。第一回は秋葉山に宿泊して、數町徒歩で袖師の海岸に出でそこを水泳場としたと覺えて居る。その後江尻方面に移り、宿泊は某寺院の事があつた。それは明治三十四五年の頃の事であつた。何れにしても氏の家袖師村嶺に近かつたので、氏には大變好都合であつた。第一回から毎年氏は水泳部に出席し、例のあせらず、迫らざる悠々たる態度で遊泳して居たところは今も眼前に彷彿とする。水泳は巧妙にはあらざれど、ぢきに普通或は普通以上に達した。

面白いのは氏と野球部との關係で、靜中野球部は私の兄柏原知格(元海軍主計大佐、現住京都市左京區神樂岡八)が始めたもので明治三十年頃かと思ふ。柏原知格が當時の一高生石井徹氏(後郵船會社々長となる)から學んだ事から起り、一高の大投手青井氏は靜岡に來り、親しく野球の指導をした。澤野通太郎氏時代には捕手吉澤潤平氏、投手松田卷平氏(後陸軍中將)で野球の一黃金時代であつた。二回遠征し來れる横濱商業を簡單に退けた。松田卷平氏は稀に見る大投手、寡言沈着ピンチに強くまた立派な人格者、後に陸軍中將に成るべき素質がその言動の内にひそんで居た。捕手吉澤潤平氏は元氣一杯黃色い聲を張り上げて活躍、松田卷平投手の善き女房振りを發揮した。然るに當時の校長はあまり野球部に理解をもたなく、野球部としては都合惡き事も少くなかつた。

一つはその理由から、我が澤野通太郎氏は野球部の委員に推された。學業

優秀な勉强家(机にかじりついてゐるカチ〳〵の勉强家でなかつた事は前に述べたが、とにかく氏は勉强家たる事に於ては間違ない)を委員に推す事は、學校の信用を野球部が得る事にもなり、又學校との交渉等にも好都合だとの理由で氏は野球部の委員の一人に推された。

氏はいつも悠然として野球場に出で、網の中に入れたボールなどさげていつも色々世話をした。氏には時間が有り餘りそれで優等になれ、成績優秀を鼻にかけるでもなかつたので、野球部委員として實にもつて來いであつた。さうしてまた野球部の信用がどれだけ高まつたか分らない。たしかに靜中野球部の一功勞者で、後の靜中野球部全盛時代？　の基礎をつくつた。

氏が宗教の事に思を用ゐたのはかなり早い時代、中學時代からで――それは或宣教師のところへ會話を習ひに行つた時に始まつた。中學卒業頃神の存在と云ふやうな問題を私と語り合つた事もあつたが、氏も全然見當がつかず、私も全然見當がつかなかつた。

氏が基督教と云ふものに觸れ始めたのは、高商の先輩で親戚たる菊地七郎氏(現關西學院教授、西宮市外甲東園住)と同宿した事が機緣となつたのであつた。菊地氏は當時から今日も猶熱心な信仰者である。通太郎氏は東京本郷區春木町メソヂスト教會本郷會堂で洗禮をうけられたが、友人の多くが內村鑑三先生の門下であつたために、內村鑑三先生の門に出入し、熱心な信仰生活に入つた。當時內村先生門下の學生には、小山內薰(後の劇作家文士)、倉橋惣三(後女子高等師範學校長)、淺野猶三郎(後傳導者)の諸氏その他多士濟々であつた。高商の同窓で信者としての親友は紅松雄二氏(高商卒業後直ちに支那の稅關に入り、數十年友邦の稅關にて働きつゞけられ、引退現住東京府下北多摩郡武藏野町吉祥寺字野田北六八六)であつた。

私は當時金澤第四高等學校在學、佛教研究者の一人として「眞友會」の熱心なる一員であつたが、澤野通太郎氏がクリスチャンとなつたとは吃驚してしまつた。さうして手紙で宗教問題の論戰をたゝかはしたが、結局私が負けて、私も金澤日本基督教會で信者となり、後東京帝大法科獨法科を卒業して直ちに

日本基督教會の牧師となつてしまひ、今日に及んだ。

然して本家本元の澤野通太郎氏は鈴木與平氏となつてから、信仰の熱を次第に失ひ、遂には信者たる事を發表しなくなつた。

然し君の高潔なる人格、溫良なる風格、又紳士的行動は、たゞ生來のものだけでなく熱心なる學生生活時代の信仰にその基礎を與へられ、その光を磨かれた事少からざるを信じて疑はない。

猶君の學生時代の信仰生活を强ひて批評するならば、餘りに謹嚴、信仰生活を窮屈なるものと考へ過ぎては居なかつたか、又內村先生門下となられた事はどうであつたか、先生は一個の天才であつたが隨分缺點も多く、鈴與氏の如き溫厚圓滿なる人の指導者としては、蓋し不適任であつたらう。とにかく私一個としては信仰生活の置いてきぼりをくはされ、只その點誠に寂しきものがある。

東京　松田卷平氏談

鈴木與平君が靜岡中學校へ入學せられた當時は澤野通太郎と云はれ十三歲の少年であつた。時は明治二十八年四月であり恰も日淸戰爭も終りに近づき三月には淸國全權李鴻章が下關に來り四月下旬には下關條約が出來、それと共に獨露佛の三國干涉と云ふ大事件が突發した時であつた。從つて國民の士氣は非常に高揚すると共に、國民を擧つて悲憤の絕頂に達した時であつた。

間もなく　明治天皇には廣島より京都へ、次で東京へ還幸あらせられ、外征軍も逐次凱旋し來り、學校から出征した喇叭手の加藤君が凱旋し、又靜岡中學の大先輩である尾崎元次郎君が中尉として凱旋せられた。

從つて中學校の生徒としての生活も相當の緊張を持つて居つたことは勿論であつた。明治三十三年の三月には中學校を卒へて東京の高等商業學校へ入校せられた。此の年の七月には北淸事變があり第五師團の出動となつたのであるから、君の中學校時代は日淸戰爭の末期から北淸事變の前迄であつた。從つて臥薪嘗膽の雰圍氣內で敎育を受けたには相違ないが、今から考

へると當時の教育はまだ〳〵不徹底であり、不充分であつたことを痛感せざるを得ないのである。

生徒の生活は相當緊張して居たことは前にも述べましたが、一面自由主義思想の全盛時代でありますから、自由放埒であつたことは勿論であります。他校の樣子は知らぬが靜岡中學校としては校風振肅と云ふ譯には行かなかつた。當時の中學校長は杉原正市先生であり、間もなく吉田良春先生に代はられて、次で君の中學時代の大部分は後の東京の第一中學校長となられた川田正徵先生であつた。

與平君の中學時代には體格は寧ろ矮小と云つた方で、四年生迄は肩揚げをせられて居つた、而も學問の方は常に優秀なること勿論で、一年より五年まで終始特待生であり眉目清秀なる美少年であつた。其の躰軀が非常に立派になられたのは中學五年と言はうか寧ろ高等商業に入られて後であつた。

君は資性明敏で而も活達であつたが殊に溫厚であつて、苟も人と爭ひをした事はなかつた。學校に於て終始特待生として他のものゝ儀表であつた故でもあらうか、內に藏して居らるゝ剛健なる氣概の如きは外形に現はすことは稀であり、順良其のものであつた。從つて表面上に現はれて指導者的立場に立つことは寧ろ鮮なかつたと言はうか、亂暴なる生徒に組する如きことなく純乎たる模範的立場にあつた。自分は與平君とは同時に中學校に這入つたが、其の年に眼疾の爲に落第して爾後與平君よりは一ヶ年の後に卒業した。從つて本記事に於ても同窓の方から傳承した事も含めて居る次第である。

中學校の生徒として諸先生より多くの感化を受けられた事は勿論であるが、川田正徵先生より受けられた感化は鮮からざるを痛感する。先生が土佐出身であり、從つて土佐出身の偉傑岩崎彌太郎氏の書生たりし關係上、彌太郎氏とは接觸が極めて深かつた。殊に川田先生が書生たりし當時、彌太郎氏の女婿たらしめむとの懇望を蹴つて斷然教育家として立たれた意氣に於ては感慨深いものがあつた。川田先生は多くの偉人傑士を輩出せられた土佐の海南學校に就て屢〻其の釐風を稱道せられ士氣の振作に努められた。又川田先生が第一高等學校の教授中に親しく交際をし又教へを受けられた宇田

廉平先生を聘せられ、中學校に於ける重要なる訓育に任ぜられたことは特筆せねばならぬ。宇田先生は當時七十歳にも近い樣な老儒者であり、專ら靖獻遺言流の教育を斷乎として實施せられたのみならず、先生自ら稽古着を着し劒道の師範迄も辭せられなかつた其の態度と意氣とは、誠に壯なりと言はねばならぬ。かゝる先生を招聘せられた川田先生の志も亦之偉とせねばならぬ。惟ふに靜岡中學校は剛健の風に於ては大いに缺くる所があつた故でなければならぬ。今日宇田先生の如き身を以て薫化指導に任ぜらるゝ教育者が果してあるであらうかを考へる時、誠に感慨の深きものがある。

更に與平君に對し偉大なる感化を與へられたのは、現に東京に居らるゝ武藏高等學校長たる山本良吉先生である。先生が靜岡中學校に於て教育に任ぜられたのは與平君の三年生より卒業する迄の間であつた。先生は倫理や歴史や英語等を擔任せられ、其の高邁なる人格と卓拔なる教授法に依り非常なる感化を與へられた。先生の教授を受ける生徒は當時の不行儀放埒にも關らず全く肅然たる有樣であり、先生の擔任科目のみは如何なる時でも豫習復習を怠ることは出來ない有樣であつた。先生が中學を去られ京都大學へ轉任せらるゝに當り、全校生徒に述べられた事を想像するに、當時の中學校は隨分亂脈であり生徒は極めて不行儀であつた。從つて先生に對する反對は四方八面より起り恰も麻の亂れた如くであつた。此の間に快刀を揮つて亂麻を斷つと云ふ概を以て教學の刷新に從はれた。從つて先生がいよ〳〵中學校を去らるゝに至りては、從來反對し來りたるものも全校を擧げて之を悲しみ、先生の偉大なるを認めたことは勿論であつた。先生から教へられた科目は今日と雖記憶して忘れないと云ふことは、先生から教育を受けたものが齊しく言ふ所であつて、勿論與平君も同樣の感慨を洩らされたことは一再ならずであつた。四五年前に先生が清水へ來られた際には、與平君の主唱に依りて靜岡富士沼津方面迄も手を延ばして同窓生を清水に集められ、先生の爲めに晩餐會を催され、其の夜は與平君の自宅に先生を泊らせられた如きは、先生に對する感謝の念が如何に深かつたかを物語るに足ると思ふ。又中村安太郎先生の明快活達なる講義、現地に卽したる教授の如きが如何に與平君の

憧憬する所であつたか。其の後先生は陸軍幼年學校の教授となられ、明治四十年十月には再び中學校長として靜岡に來られた關係上、永く與平君と先生とは親交のあつたことは勿論である。

其の他の夏目秋藏先生や鈴木正錬先生やに對する感謝愛着の念の深かつたことは言ふ迄もない。與平君の中學時代には靜岡中學校はベースボールの全盛時代であつた。川田校長はベースボールを以て共同一致の精神を養成すべき最良の運動なりとし、之を以て校技なりとして大いに推稱した。勿論劍道や柔道なども相當に行はれて居つたことは無論であつたが、對外試合の關係からか校長の奬勵からか學校では相當の勢力があつた。

與平君は四年以來野球部委員として盡力せられ、所謂横濱商業との競技に勝つた靜中全盛時代の一重要因なのであつた。與平君は勿論ベースボールが特に上手であつた譯ではない、自らキャッチボールをやり乍ら熱心忠實に委員業務を實施した。又選手等の爲に學科の下讀み迄も實施した如き事は常であつた。隨分不勉强な選手も尠くはなかつたので、復習や豫習をも手傳うて貰ふ如き情況は常であつた。君が特待生であり質問には何でも應じて與れたので、お蔭で助つた選手も尠くはなかつた。當時野球部の選手を中心とした校風刷新の運動が行はれたことも事實であつた。不品行な學生に制裁を加へた結果他校へ轉校したものもあつた。今日から考へると甚だ不徹底であり、其の方法も宜しきを得て居つたとは思はれないが、かゝる運動に際しても或特定の卒業生と連絡を保ち、與平君等も直接間接に此の校風刷新運動に預つて居つたのを想起せざるを得ないのである。要するに中學時代に於ける與平君は、全く模範的の生徒であり有爲なる青年であつた。其の卒業に際し川田先生が非常に熱意を以て君の高等商業に入るのを喜ばれ、無試驗入學に努力せられたのは誠に故あることゝ思ふ。

其の頃より人の上に立つべき人として、人格上に於ても識力の上に於ても全校より認められ、將來を大いに囑目せられた次第である。かくて後には諸種の事業を經營せられ、歐米にも二回も行かれ、最後には貴族員議員となられ乍ら大なる活躍を見ずして、中途に逝去せられたのは誠に惜みても餘りある

次第である。

序であるから一言して置き度いのは、教育家の學生生徒の訓育が如何に大切であるかと云ふ事である。當時に於ける教育は質實剛健の氣風はあつたがまだ〳〵不徹底なる點が大いにあつた。時代の趨向を洞察し、明治維新の烈士の如き人物を養成せずんば止まざるの決意を以て終始一貫せる教育を施すことが、如何に必要なるかを今日に於て痛感せざるを得ない。現在の如き制度の下に於ては之が實現は不可能に近いのであるが、一歩一歩此の目的に近き教育が實施せられむ事を切望して止まない次第である。

靜岡市　加藤周藏氏談

鈴木氏は幼少の頃から頭腦明晰で思慮周密、溫厚謹嚴な性格で神童と謳はれ鄕黨賞讃の的であつた。當時は未だ社會一般に教育程度が振はず、多くの子弟は高等小學程度を最高とし、中等學校に進む者は一町村に一二指を屈するに過ぎなかつた。養家の澤野家では親戚相寄つてその進學に就いて相談したが、是非の議が區々に岐れ決定が容易でなかつた位の頃である。當時親戚の庵原郵便局長山梨睦雄氏が「斯程の人材を小學教育だけで終らせることは遺憾至極である。吾等一門より頭角を現はす人材を社會に送る義務もあり、是れは獨り通太郎一人の爲ばかりで無く家門の譽れともなるであらう」と斷乎と主張したことに依つて漸く衆議一決し、明治二十八年四月に笈を負つて靜岡中學校に入ることが出來たのである。靜中へ入學すると間も無く先生にも同僚にも人物の優秀なことを認められ、體軀は小軀に屬する方であつたが、成績の良いのと美少年であることが評判であつた。二年生になると杉本義郎、鈴木熊太郎兩君と共に三人で級中の特待生に選ばれた。この特待生といふのは優等生中の優秀生で、家庭の貧富に拘らず奬學育英の爲に與へられた特權で、授業料免除の恩典に預つたものである。澤野君は中學を卒業するまでこの特典を獲得し、常に級中の首席次席爭ひに終始した程實に拔群の成績であつた。在學中學識卓越、德望嘖々で校内に普く名聲を博したので親交を求める者も隨分多かつた。四年の頃である。學生の野球熱が旺んにな

り殊に靜中では先輩の應援指導の下に技倆も進み健全な「ナイン」を構成して大いに面目を一新しようと企て先づ之が爲には生徒中から有力なる野球部委員を推擧して學校當局や他との交渉に當らせることが良策であると考へ、眞先に白羽の矢を澤野君に立てた。而して君は「僕は部員としての責務は甘受するが委員としての大任を果す器で無い」と言つて固辭した。野球部では數次の折衝を重ねて遂に應諾の已むなきに至らしめ、その返事を得て一同歡喜するのであつた。爾來君は野球部の矢面に立つて籌畫統率に當り、學校當局と生徒間の感情問題も融合せしめ、校風の刷新に寄與し、校外の應援團に對しても實に好評嘖々であつた。由來野球部員は運動に熱する餘り學業不振の憾みを常とした。是れは選手の頭腦が劣るので無く、熟技の爲の練習に日子を消費し、加之心身過勞のため勉學の機會を逸し勝ちであつたからである。友情に富む澤野委員は之が救濟の方策を熟慮して、部員の缺陷を補ふことに決心した。輒ち平素教官よりの宿題を始め定期試驗の準備等一切先づ自分が之を整へ、部員を招集しては事前に之を講義もし疑義にも明答を與へて、試驗地獄から救つた功は偉大なものであつた。僚友は爲に學業の憂ひ無く君を「活字引」と呼んだのである。全く餘裕綽々と溢れる實力を持つて居られたが、克く友人の面倒を見られたその友情に對しては敬服に堪へないものがあつた。高邁なる人格を以て後年鈴與王國と謳歌されたのも宜なる哉で、その素因は夙に少年時代から培はれて居たのである。

巨人鈴木與平氏を追憶すれば綿々として盡きないものがあり、殊に親交の厚かつた自分としては唯々無量の感慨に打たれるばかりであるが、茲に餘り世間に知れて居ない飛行事業に對する隱れた援助に就て是非紹介して置き度いと思ふ。大正十二年の暮れに青年飛行士根岸錦藏君が清水に來て、三保の地に飛行場を建設しようと計畫したが、それは莫大の資本が要る、どうしても富豪の後援に俟たねばならないと熟慮の結果、時の靜岡電鐵重役中條一資氏の斡旋に依り鈴木氏に後援方を懇願に及んだ。仁情に富み地方開發に熱意を持たれる氏は快く私財を投じて之を援助し、更に縣會議員であつた關係上、早速魚群搜査飛行計畫の急務なる所以を縣知事に上申し、水產業發展の爲

に是非共その完成を期したいものと四ヶ年に亙つて設置運動を繼續し、遂に成功して魚群捜査飛行事業を完成することが出來、根岸飛行士も衷心より喜んで感謝の言葉も無かつた。然し飛行事業の經營は容易なもので無く、根岸飛行士は多數の助手を使役して訓練を施し、之に對する手當や飛行機、飛行場の經費等多額の經常費を要した。當時遞信省では民間航空事業の奬勵に拍車をかけて、修繕維持奬勵費として實費の七割を年々補助して與れたが、決して滿足すべくも無く僅か一兩年の内に千數百圓の缺損を生じて終つた。此の苦境を聞いた鈴木氏は深く同情して窃かに數百圓を贈り、負債償還の資に提供したので、根岸飛行士の感激譬ふるにものなく、毎朝合掌して感謝を續けたといふことである。昭和七年に萬國氣象臺倫敦會議が開かれ、我が國よりは中央氣象臺技師關口鯉吉が出席した。任務を終つて歸朝するや同會議で決議された高層氣象極地觀測の實施を計畫し、之を實兄に當る自分に相談された。そこで自分は念頭に浮んだ根岸飛行士を最適任者として後援は清水の大御所鈴木氏に依頼するに如かずと考へた。餘暇を求めて本邸に氏を訪れ久闊を謝しこの話をすると、氏は大賛成で此の事業は美舉であると言つて新に五千圓を投じて新型飛行機一臺を根岸飛行士に與へられた。是が高層氣象觀測第一號機で、之より清水灣頭空高く雄飛の姿を仰ぐ事になつたのである。この事業は我國の魁で之より六ヶ年間文部省の經營下に試驗的經營を累ねたが、政府は其の有效なことを認め經常費十八萬五千圓を計上して議會の協賛を經た。然しその後支那事變處理の關係上經費運用の留保を命ぜられたが、軈て再び復活して本邦氣象界に偉大なる貢献を齎すものと信ずるのである。尚之と殆んど並行して根岸飛行士は農林省の囑託に應じ、冷害對策飛行として毎年冬期北海道千島近海の流氷調査に從つて今日に及んだが、斯くの如く根岸氏を援助して公共的民間航空事業の發達に寄與した功は實に大なるものがあり、而も陰に援助して社會公共の爲にたゞ其の成果を樂しまれた所は洵に敬服禁ぜざる次第である。氏が偶〻病の爲に聖路加病院に加療中と聞くや根岸飛行士は東都に訪れ、昌子夫人を通じて御禮旁〻委細現況の報告をしたところ、床中尚且つ我が事の様に喜ばれたとの事である。氏

は稀に見る人格者で全く至誠一貫の士であつた。今鈴與商店の講堂に一歩を印すれば「至誠一貫」の額に胸を打たれる。之れぞ氏の一生を通じた座右銘であり、實踐躬行したものであつて、對壁に掲げられた肖像額と共に仰いで景仰の念愈〻深く洵に感慨無量である。鈴木氏の如き巨人を親友に持つ事の出來た自分は實に幸福であつたが、先立たれて見ると寂寞の情を禁ずる事が出來ない。時々追憶に耽りたゞ切に御冥福を祈る外に術も無い自分である。

三、元市長の追憶

朝鮮總督府　塩原時三郎氏　談

自分が弱年にして清水の市長を引受けたのは昭和四年の晩秋であつた。唯々平凡な官界一路を歩行して行かうと思つて居た自分には、思はぬ運命の變轉であつたに相違ない。勿論迷ひもした。考へた。考へたつて分らなかつた。先輩にも相談して見た。誰も賛成はしては呉れなかつた。斷りたかつた。逃げ出したくもあつた。それにも拘らず運命の太い綱で引張られて行くが如くに遂には就任した。唯それは鈴與さんの熱の爲めだ。其の熱に燒かれて了つたのだ。世にも恐しいネバリだなあと感心した。感心し始めた頃にはもう八九分通り落成して居た事は實際だ。今から考へればこの鈴與さんの熱とネバリこそは、今日の清水市を生み育て又あの樣に盛んなものとしたのであらう。

又鈴與商店の大成に貢献したことは勿論である。いよ〳〵就任してからの自分は、勿論一身を捧げて清水市の種々なる難問題の解決に突進したが、自分ながら異常なる熱の上げやうであつた事を認めざるを得ない。これは勿論責任觀念にも發するのであるが、鈴與さんの知遇に斯うして酬ひたいといふ感情が推進力となつて居たことは、どうしても否定するを得ない所だ。

難問題と四つに組んで泥まみれの勝負をしてゐる自分に對して、鈴與さんは常に例外なしに良き指導者であり、良き應援者であり、又時には一緒に戰ふ戰友でもあつた。これがあの大商店を双肩に擔ひつゝ餘剩の精力を傾注しての事だから一寸眞似が出來ない。この大活動はおそらく大清水港の建設

を自らの畢生の事業とも思はれたからに間違ひはないが、又一方に於てこの若僧を失敗させたくないとの、何とも言ひやうのない親切心の發露であることを自分は涙ぐましくも痛感して居たのである。

そして又この事が自分を驅つて、愈〻次から次へと困難な問題に突進させた事は今日にも愉快な思出の種である。

昭和五年、聖上陛下清水港に行幸の砌り、忝くも賜餐の事あり私共もその御恩遇に浴し得たが、その折鈴與さんは、清水の市制が陛下御成婚の御盛事記念として施かれた旨を聞え上げたやうに記憶するが、陛下におかせられても御うなづきあらせられたかに拜せられたのは誠に恐懼の至りであつた。退出しての歸途鈴與さんが「塩原さん、今日こそ市長になつて好かつたと思ひませんか」などと言はれたが、同時に市會議長である御自分の事も言つて居られるやうに感じられて微笑せざるを得なかつた。

やがて滿洲事變が起り、翌年の早春自分は市長をやめさせて貰つて、滿洲へ赴任した。鈴與さんは歐米視察に出かけられた。歐米の各地から時に書信を頂いたが、ことにスイスからの書狀には細々の戰後のヨーロッパの形勢が書いてあり、最後に「貴臺も是非一度歐洲の御視察を御決行あり度」と例の親切がにじみ出てゐた。大いに御自身得る處があつた證據であらう。このおすすめ丈けは未だ實行が出來ずに居ることは申譯ない樣な氣がする。

爾後月日は流れて自分は朝鮮に於て所謂「南統治」に參畫するやうになつたが、同氏と自分との交遊は少しも變りはなかつた。やがて御病氣の報を聞いた。どの位心配したか分らない位であつたが、遂に不歸の客となられたのは何とも殘念の限りである。

鈴與さんの人と爲りは今更自分の冗筆を俟つまでもなく多くの人が知る處であらう。清水港、其の背後地たる清水市、靜岡縣、其の近縣の建設に與へられたる功績の偉大さは、到底限られたる紙上には表現し得ないと思ふ。

於茲謹んで英靈を弔ふと共に、同氏によりて生み且つ育てられたる清水市が愈〻順調なる發達を遂げて、氏の念願の如く大清水となることを祈つてやまぬ次第である。

四、心友の憶ひ出

東京　友松圓諦師　談

この五月一日、鈴與商店で先代の一周忌逮夜をつとめるから是非きてくれるやうにとのお招きで清水に出向いた節、一周年に因んだ所懷を述べたことである。先代與平氏が他界された直後の方が、いろ〳〵とつよい思ひ出も印象もあるにはあるが、さて、かうやつて丸一年以上にもなつて、鈴與商店の今日のいろ〳〵盛大さを通して、先代を靜かに思ひ出して見ることは、又格別に、なつかしいものである。

一周年の折にも社員方に申述べたことであるが、先代與平氏は近世靜岡縣のうんだ偉大な人物の一人である。然し、多くの地方のうんだ人物といふものは、早く田舍から足を洗つて中央に乘り出して人物になるのである。勿論靜岡縣といふところが地の利をえてゐるといふことも忘れてはならず、鈴與商店の業態取引といふものにも依らうけれども、鈴木與平氏は本據の清水港を離れず、この土著の人でゐながら、とう〳〵日本一流の人物になつてしまつたところに、その偉大さ、堅實な偉大さとでもいふものがあると思ふ。氏は終始一貫、清水思ひであつた。私とのおつき合ひはほんの二十年足らずではあるが、初めて清水市の水道をはじめたとき、私はわざ〳〵興津まで水源地の設備をみせてもらひに行つたものである。「これで清水市が二十萬人の人口になつても大丈夫です」といかにも嬉しさうな滿足感をその笑顏に示された。港灣の設備の竣功したときにも、わざ〳〵私を岸壁につれて行つていろ〳〵こまごまと說明して下さつた。先代與平氏は全く清水市の守り神である。それでゐながら、いつの間にかぐん〳〵と日本一流の人物圈にくひこんで行つてしまつたのである。

しかも、その人物になりかたも、よくあるやうな賣名的のことは一つもなかつた。常に消極的な、受身であり乍ら、その氣品の高い受身の態度こそが、その不易の誠意と親切とによつて、三倍五倍の威力を示したのであらうか、誰言ふとなしにひきつけられてしまつたのである。

勿論、氏にも矛盾があつた。多忙な業務を持つてゐながら、市政に關係したり、縣政に頭をつつこんでゐられた。私などは、最後まで、政治に關係なさらぬやうにおすゝめしてゐた一人である。最後の貴族院議員のときにも、私は今更、お成りにならんでも、すでにそれより以上の人物として世間でみとめてゐるのだからと申したこともあつたが、何分、地方的な事情もあつたらうと見えて、とう〳〵おうけをされた。今から考へてみると、それでもよかつたやうにも思へる。とにかく、先代は政治には無關心ではありえなかつたらしい。私は度々考へてみたことがあつた。「どうして與平氏ほどの人物が政治から超越しえないのか」と考へてみた。その當時の政治は經濟力をもつてゐた。今日の無力な政黨とはちがつて、現實の死活を握つてゐたのである。清水市の利害から離れることをしなかつた先代が、政界から超越しえなかつた理由を、自分はさう考へて見たのである。素より、氏は圓滿な人格の持主であり、微妙な感情をさへ持ち合せてゐた。從つて、人間がすきであり、人心をまとめる異常な才をもつてゐた。そこに、氏の名議長ぶりとなり、名組合長の風格が出現したのである。とはいへ、氏の道德感、良心感につよい點は、普通の政治家になりすますことが出來ず、氏の精神生活、求道生活はかうしたところに動搖がひそんでゐた。たまには、氏の哲學論、宗教論に關する質問をうけたこともあるが、十中八九までの會話はいつも現實處理に關する理念であつた。理想と現實、宗教道德教育と經濟政治この二つをどう調和させてゆくかといふことが、氏の求道者的半面をつくり上げたのである。

先代與平氏を語るときに、昌子夫人から切りはなすことは不可能である。それほどに、內室の存在は與平氏の生涯をかくの如くあらしめたのである。私は、今日とちがつて、三十何年も前の清水市に、いや、草深き清水港に、學校出の新進思想家の與平氏夫妻を迎へたことは、この上もない天の贈物であつたやうにさへ思へる。內外公私、自分乍ら自分を左右しえないほど多忙になつたこの頃、三日も四日も清水港に遊んだことのある私が、ふと、車窓から清水港の盛觀、清水市の偉容を目にするとき、私は、先代與平氏を偲ぶの情が湧然として涌き起つてくると共に、先代の遺德この新市を守りたまへといのりたい氣が

してくる。

五、業界友人の追憶

在滿洲國　高碕達之助氏　談

先代與平氏に御近付きを願ふ樣になつたのは、私として、比較的近年の事に屬し、古い昔のことは多く承知して居らないのが殘念であります。

先代に御近付きを願ふ樣になつた頃の先代は、既に東海の「鈴與」として、或は清水の鈴與か、鈴與の清水かと言はれる樣な大きな存在であつたのであります。東海各所に色々の事業をせられて居りましたが、別けて清水市とは最も關係深く、清水の代表は鈴與でありましたが、鈴與は單に清水を代表するに留まらず事實上東海を代表せるかの觀がありました。國內的には既に充分重きを爲して居られましたが、偶〻植田氏村上氏の懇望もあつたのでありませう、輸出鮪事業に資力の一部を注ぎ自ら陣頭に立ち、外に出でては組合長として是が輸出統制、市場開拓に並々ならぬ努力をされました。鮪も冷凍と罐詰の二本建で、對米輸出の白熱化以來恰度十年、連年其の貿易狀態は全く日米間の國際情勢其の儘を如實に表象した複雜困難を極めたものでありました。夫れを兎に角あれ迄にしてなされた氏の努力と熱意に付ては、罐詰界に突如として彗星現れたるかの感を覺えさせたのであります。

鮪に次いで、夫れから東海の重要物產の一たる蜜柑罐詰に力を注がれるに到りました事は、罐詰業界にとつて更に意義深いものがありました。

お話が戻りますが、私が初めて氏に御目にかゝつた時に「清水港は橫濱と名古屋の中心であるが、輸出貿易を進展せしむるには、靜岡の茶だけでは物足らない、何か外に良い物產が無いか」と云ふ事に苦心して居られたのでしたが、其の後「鮪の罐詰で初めて重要輸出品のアイテムの一つが增えた、引續き何でも罐詰として輸出を、增進し清水港の繁榮を計り度い」との御話があつたのであります。

幾多の公職を負はれた氏の其の日常は察するに餘りある繁忙を極められたものでありましたが、其處を一度ならず二度迄も渡米し、華府政府の關稅調

査委員會のパブリック・ヒヤリングに自ら出席し、日本罐詰業の爲に盡された努力は親しく其の席に列した私としては全く忘れ得ない思出であり、罐詰界に關係を持つ吾々としては、氏に將來を倚賴する所多大なものがありましたのに、罐詰界、食料品界に關係されて、比較的短かい年月で急逝される樣な結果になつたことは洵に諦め切れぬものがあります。業界に寄與された所は時間的に決して充分であつたとは申せませんが、其の盡された功績は洵に不滅で偉大なものがありました。彗星の如く現はれ、又彗星の如く消え去られた鈴木與平氏、謹んで氏の御冥福を祈ると共に、氏の偉業を繼ぐことに業者は一致協力致さねばならぬと思ひます。

（本稿及び前稿中先代與平氏とあるは當主に對して先代と稱せしものなり）

六、店員の思出

櫻井源作氏談

主人が縣會議長をして居られた時の事である。ある日縣會が險惡な空氣に覆はれて暴漢が飛び出たりしたなどと云ふ情報が入つた。そこで店の若い店員は行つて見たくて堪らない。私も其の一人に加はつて夜の九時？頃縣廳の議事室へ行つて見た。その建物は今でも殘つてゐる。

行つて見ると傍聽席がギッシリ一杯の人であつた。主人は丁度議長席に頑張つて居られた。良くわからなかつたが豫算を審議してゐるやうに見受けられた。少しやつては「暫時休憩」となる。又開會したかと思ふと休憩になる。こんな事が何度も何度も繰返され、各派で夫々協議をやつて又會議になるやうに思はれた。

僕は其の時森和一さんの演說をきいて「うまい」と思つたりした。十二時過ても終りさうもない。誰言ふとなく今日の縣會は夜通しだ、夜明しだと言ふ聲が聞える。實際物々しいやうな空氣は吾々にも察せられた。

廊下で寺崎乙治郎さんに會つておじぎをしながら「いつ頃までかゝりますか」と訪ねたら「いやわからんが、もう少し御主人を吾々に貸して下さい、賴みます」などと言つて居られた。主人を廊下で待つてゐる間に早足で通られながが

ら吾々を見てニッコリ笑はれただけである。しかも其の顏には「オー君達も來てゐたのか」と言つて居られる事がわかつた。主人はそれからあちらこちらへ忙しさうに歩いた事もあつた。何か交渉を纏める事でもあるらしく見えた。間もなく又縣會がはじまつて主人は議長席についた。秋山忠平さんが豫算を修正して行つた。議席から「ワカランいくらだ」などと言ふ聲がかゝると、秋山さんはそれを睨むやうにして大きな聲で〇千〇百〇十〇圓〇錢と應酬的にやつて居られた事もあるが、一通りスラ〳〵と進んで行つた。

秋山さんの修正が終ると番外の白根縣知事閣下が修正の細か過ぎる事を指摘して演說された。そこで確かに休みになつたやうに思ふ。又それから會議が開かれて今度は濱松の人だとか云ふ議員さんが現れて「眞面目にやつた我等の修正案を入れぬとは縣會の神聖を汚したるものである、知事閣下の取消を要求する」と云ふ悲憤的な演說をして降壇した、實に上手な演說であつた。どう〳〵それからどうなつたか朝までに納りがついたらしく、すつかり明け放れてから主人は自動車に乘られ、私共も乘せて貰つて淸水へ歸つて來た。歸る道々車の中で話された事を思ひ出すのである「縣會と言はず市會と言はず花々しくやると人氣を集めるが、物事は目的を外れては何もならない、何も纏つた事なくして終るやうな事になると議員はくたびれ儲であり、又大きく言へば縣民に申譯ない事になる」と笑ひながら「あんな時には面倒臭くなるし、あせり氣味にもなるし、勝算のある黨派は强がりを言ひ度くなるが、そこを正しく纏めて行くのが骨の折れる處さ」「いや世の中の多くの事はさうだね。華やかにやつて何も實のない物が出來てゐる事が相當にある、お互に注意すべき事だ」と僕は主人の車中談を今だに忘れんとして忘れることが出來ない。そして短かいお話の中に主人の性格がよく現れてゐると思ふ。

主人は一の事を二に見せようとする事は避けられる人であつた。むしろ二つのものを一つに見て貰つても人のためになる事なら喜んで居られる謙讓さを持つて居られた。己が功をほこらず又身分不相應なことを言ふより內輪に安全に用心深く地味に堅實に進まれる方であつた。されば表彰に關する內相談等があつても、主人自身の事になると隨分固辭せられた事を私共

は知つてゐる。さうかと言つて事に依つては將に乾坤一擲の大英斷もされたのである。細心にして大膽しかもおごらぬ人であつて、今日故人となられた主人を偲び益〻其の偉大さに頭を下げざるを得ないものである。

主人の身を以て衆に示されたる教訓は、多くの人を無言の内に指導せられた事又實に大なるもので、私は未だ目の邊り其の崇高な態度に頭の下るを覺えるものである。

昭和十二年の大晦日の事であつた。いつの年でも商家の年末は目のまはるやうな忙しさに終始するのである。吾々は與へられた細部に渡る仕事を整理し内外共に走りまはる日であるが、主人はこゝで一年間の總結末をつけられ、尙來るべき年の準備を構成される日である。

此の日の主人は早朝から特に多忙の樣に見受けられた。お晝過からは主人の姿を見受けなかつたが、私共が色々殘務をやつてゐると夜の十時頃歸つて來られた。

主人は稍〻疲勞して居られるやうな樣子であつたが、ニコ〳〵しながら店の中を見まはして安心したやうな面持をされながら二階へ上られた。「靜岡へ行つて來た。いやどうも色んな話が出たもんで中々手間取つたよ。アーア昭和十二年も忙しい年であつたなあ!!」

「それから君〇〇へ金を送つてくれたかね」「はあ、それは昨日確かに送りました」「さうだつたかな、そりやよかつた。聞かう〳〵と思つて忘れてゐた。元旦は店は八時からだつけね。それから市の方があるね。さうだ拜賀式で祝辭を讀むんだつたね。まだ準備してなかつたが之から作らうぢやないか。君も一つ書いて見てくれ給へ」

そこで瓦斯ストーブをつけて選擧の時に使つた反古紙の裏へ書き始めた。主人は愼重に考へて時々鉛筆を動かして居られた。私には中々重荷なので容易に筆が進まない。其の中に主人は非常に眠くなられたらしく居眠をしては又書き〳〵して居られたが、居眠の方が多い位になり主人の方は纏る見込がつかなくなつた。自分の責任が大きくなつた樣に感じたので、主人に外套をかけて上げて一生懸命書いて見た。十二時一寸前に漸く下書が出來た

ので主人に訂正を願つた。主人は極めて懇ろに訂正され、終ひにはどこが本筋かわかり悪いまでに修正されてしまつた。

「あんまり直してわかり悪くなつた、君一度書直して見てくれ給へ」そこで私は急いで書き直して見た。主人は一通り讀まれて「ウン大分よくなつた」と言はれながら、更に愼重な面持で色々と修正され、或字句に行當ると「之は却つて元の方がいゝやうだな」などと獨言をされたりして相當たくさん修正され「大變でもう一度書直して見てくれ給へ」と言はれた。次の出來上りを見られて「うゝん、よからう上等だ」「あゝ君も大變だつたなあ」と言はれて奥へ行かれた。

僕は原稿の清書を三木君に頼んで更に店から奥へ伺つて見ると、主人は奥さんや奥づとめの人々が何やかやと始末をして居られる中に居られた。色色な片づけの樣子を見て「わしの手傳ふものはないか」と言ひ度いやうな樣子をして居られた。「いや君どうもお使ひだてしてどうも御苦勞樣でした。さあ早く歸つてやすんでくれ給へ」私は心から働く者の喜びを味ひながら、もう元旦の早朝である清水の町をコツ〳〵と家へ歸つたのであつたが「主人は私共よりまだおそく休まれることになるが、明日は大變な責任を持つて居られるのに隨分お骨折の事だ」と心配になつた。

翌朝庶務係であつた私共は少し早めに出勤して見ると、主人は既に禮服に威儀を正して居られた。主人は實に熱心に眞面目に事を處理せられた人である事はあまりにも有名な事であるが「たふれて後止む」と云ふ事實を時に見てゐる。即ち力行努力の結果全く疲勞せられた場合でも尙根氣のつゞく限り力を盡された。文案等を作つてゐながらペンを握つて眠られる事も誠に少くなかつた。蓋しあれ程多種多樣の問題等に直面せられ、一々眞劍に考慮の上之が處理に當られた事は、あまり頑健でなかつた主人の體力を、精神力と責任感と共存共榮の大きな心から引立て來られたものと思ふ。

僕は主人の偉大なる熱心さには常に頭が下つた。主人位の身分であれば年末は早く仕事を切上げて溫泉へでも行くか、さもなければユックリとドテラにでもなつて梅花を樂しみ鶯の聲を聞くと云ふ事になるのが世の常である。然るに主人は店の人々が歸つた後まで小言も言はれず營々として爲す

可きをなされ、最善をつくされた態度は正に人の師表であつたと思ふ。

主人は同情心に厚い御方であつた。某年の春或人が、自分の持つてゐる宅地を購入してくれと依頼して來た。主人は大要の筋道を聞いたゞけで後の細目の調査は係の者に命じて外出されたのである。私共は係として各種の調査を終へて一應報告すると、「大して欲しい場所ではないが買つて置いたら何かに役立つ場合もあるだらうから代價等も調べて見よ」そこで私共は標準價格や色々の調査をなし、それより一割程度安く買つたらよからうと云ふ事に腹案をきめて、先方と値段の交渉をして見た。當時は土地は捨賣をしないと中々買手のない時期でもあつたので、賣人は何等の異存もなく承認した。

吾々はもう少し安價に交渉してもよかつたのではなかつたかとさへ思つたが、先づ之でよからうと云ふ事になり、主人の決裁を得可く報告した。「色々調べた處相場として〇〇圓ですが此の一割安ではどうかと思つて先方へ交渉しましたから、之で登記手續等に移つてよろしいでせうか」主人は圖面をひろげてよく見直され、又案にも目を通して居られたが、私共二人に對して極めて嚴格な態度で「君達の買入れる案は一應宜しいけれ共、此の土地を賣らなければならない先方の理由は困つて整理をすると云ふことにあるんだから、相場より安く買ふと云ふ事は斷じていけない。人の困ると云ふ場合に安く値をつけると云ふことは、やりさうな事だけれ共さう云ふやり方をするのでない。此の土地は標準より一割高で買つてやるやうにしてくれ給へ」と云ふ決定を與へられた。私共は主人の高邁にして同情深き心に只無言のお禮をして引下つたのである。

思ふに商人としての多くの考へ方は、より安く買つてより高く賣ると云ふ事が常識になつてゐたやうな世相の場合に、主人は斯る卑劣な考へは決して持つて居られなかつた。相手を識り相手の立場を尊重された事は實に偉大なるものであつた。人に對しては兎角云々をしても、自分の財布から餘分の金を出す段になると中々實行し難いものであるが、私は主人に就て正しくそれを教へて頂いたのである。主人は此の外自動車の買收を依頼された時も同樣の買方をして居られた。

「主人はなぜわざ〳〵損をして物を買ふんだらう」などと言つた人もある位であつた。そこには吾々の量り知れない度量と人の立場に注ぐ湧然たる同情が盛られて居つたのである。主人は訓示をされる時「世間のおかげ様で」と言はれた事が誠に多い。店員の家族に對してさへ、こちらよりもひく〳〵頭を下げられた鄭重なる態度は、主人の心からなる主從關係を超えた感謝の現はれであつた。店員から「之をやつて下さい。此の仕事を始めてはいかゞでせう」と持ち出しても「それは〇〇君に悪い。〇〇で困るだらう」等相手に至大の影響を及ぼす事であれば容易に應諾せられなかつた。しかし多少の障りはあるが之を斷行する事に依つて清水市のため、又業界のために斯る利得があると云ふ信念を得れば、斷然たる決意の下に邁進せられたのである。要するに主人は相手の立場を大きな見地から見通して居られた事を偉大に思ふ次第である。

第十五章　家人と遺志顯彰

一、昌子夫人

女子大學に於て修德研鑽の功を積まれた夫人は夙に賢明の聞え高く、その高邁なる識見と錬成された婦德とを傾けて偉大なる夫君に仕へ、常に幾多の事業經營に、或は公共活動の爲に殆んど不在勝な主人の留守を擔當して鋭意内助の責務を全うし、克く後顧の憂ひを無からしめ、齊家育兒は固より家庭と社會とに處して萬端の掌理、些の遺漏なく、洵に賢夫人の令名を謳はれたのである。夫君が東海の巨人として天下に名聲を博したその裏面には、内助の偉大なる功績を擧げられた令室の存在を忘れてはならない。夫君に代つて家事を整へ事業を督し巨細の用務を聽き、その生活は隨分繁忙を極めたのであつた。而も忙中尚且つ地方婦人團體の爲に力を輸し、或は清水市愛國婦人會名譽分會長に、或は大日本國防婦人會清水支部長に推されて、婦人の修養、銃後

奉公に率先盡瘁せられ、清水市女子青年團長としては若き女性の誘掖善導に勗め、或は市内婦人有志を以て不二婦人會を組織して專ら精神修養の方途を講ずる等その貢献する所多く、殊に女子青年指導の如きは三十有餘年の久しきに亙つて渝らず、皇紀二千六百年の記念に、靜岡縣知事及び文部大臣より多年の功績を表彰されたのである。　その後大政翼賛會清水市支部參與に推され、清水市青少年團が結成されると顧問に委囑され、婦人界の最高峰として重きをなし、夫君と永訣後は當主の優しき相談相手となり家事を督すると共に、婦人團體の經營に變らぬ努力を續けられ、内外の信倚を受け益ゝ社會の爲に誠意を竭されて居る。

二、當　主

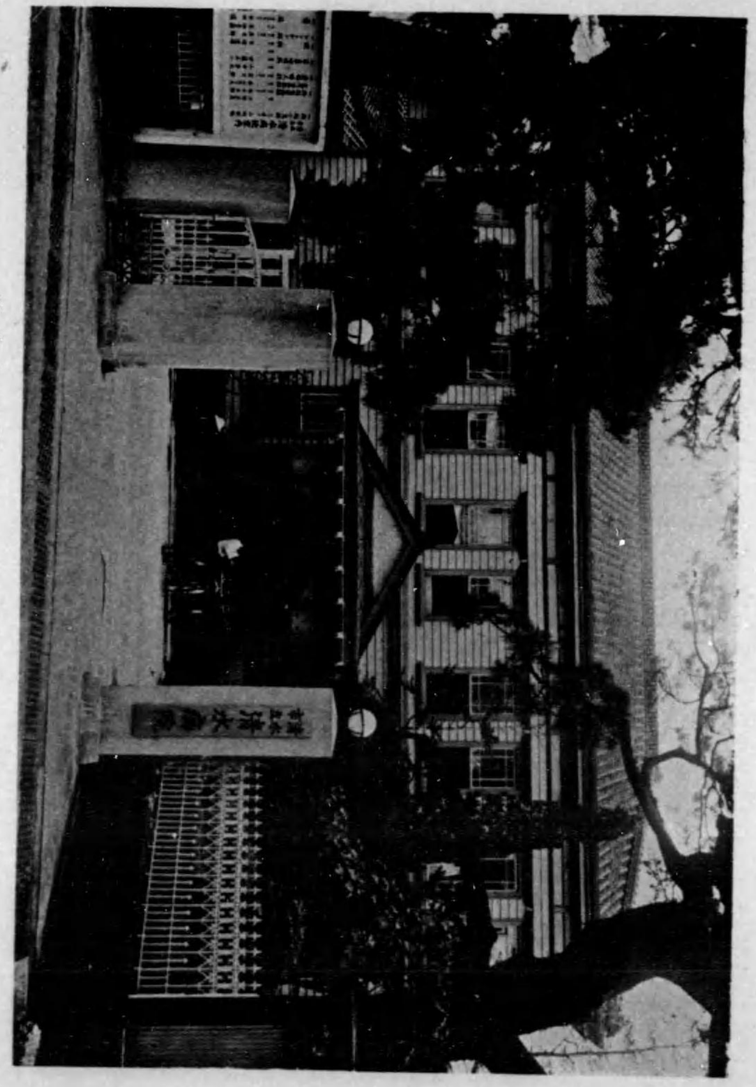
嗣子一郎氏は嚴父の長逝につき家督を繼承して先代の名を襲ひ、七代目の鈴木與平氏として活舞臺に立たれる事になつた。　父君の血を受けて洵に溫厚聰明なる紳士であり、その將來は衆目の囑望する所で、既に鈴與商店の社長たるは勿論、幾多の會社に關係して重役、社長となり或は清水市商工會議所副會頭に推されて早くも實業界に聲名を擧げ、尙清水市勢發展調査委員となり或は大政翼賛會靜岡縣支部參與同清水市支部理事に委囑を受け、又清水市青少年團副團長に任ぜられる等、氏の活躍は各方面より前途多大の期待を懸けられて居る。　夙に父君に隨つて米國を視察し、學を最高學府に卒へ、親讓りの明智と德性を備へて世襲の舞臺に活躍する氏の前途や洋々として期して寔に待つべきものがある。

尙、次男要二氏は既に良妻を迎へて、一家を立て、その非凡なる才幹を傾けて令兄に協力し、三男清司氏亦明朗濶達の資を以て熱誠家業に竭し、四男辰衞氏は目下東都に遊學して專念研究修養に精進中である。　洵に克く夫々嚴父の遺訓に遵ひ、和衷協力して遺業の達成に邁進せられるので、家運愈ゝ隆昌に趨き、巨人長逝の後も全く磐石不動であつて、在天の英靈も嘸々滿悅の事と思はれる。

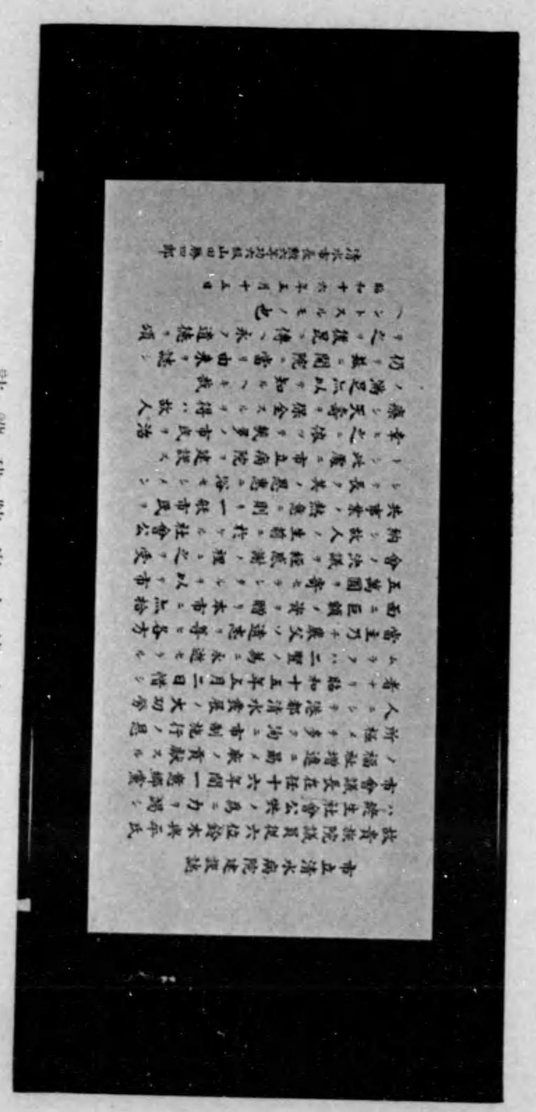
三、遺志顯彰

當主は先代の日頃社會公共の爲に盡瘁された事を深く思念し、その遺志を尊びその德を顯彰する爲に、母堂と相圖つて各方面に多額の金員を寄贈されたのである。今こゝに知り得た範圍のみ列記すれば、

清水市へ十五萬圓、清水商工會議所へ一萬圓、靜岡縣育英會へ一萬圓、鈴與育英會へ一萬圓、清水市教育會へ五千圓、清水食品產業報國會へ五千圓、東京商大へ五千圓、忠愛國民學校へ三千圓、靜岡縣社會事業協會へ三千圓、清水運送睦會基金へ五千圓、清水市銃後奉公會へ二千圓、清水國民學校へ一千圓、清水市社會事業協會へ一千圓、清新會へ一千圓、天野同漕睦會基金へ一千圓、清水精機產業報國會へ一千圓、司法保護事業聯合保護會へ五百圓、清水市佛教會へ五百圓、在鄕軍人會清水分會へ五百圓、清水倉庫共濟會へ五百圓、鈴與煉炭、再製鹽工場產業報國會へ四百圓、在鄕軍人會清水市聯合分會へ三百圓、清水市靑年團へ二百五十圓、清水市女子靑年團へ二百五十圓、清水市愛國婦人會へ二百五十圓、同國防



院病るれ成てつ依に附寄の家木鈴



市立清水病院建設誌

市長清水清

此度清水病院ノ建設ニ当リ市長ノ命ニ依リ其ノ経過ヲ誌シ後世ニ伝ヘシムルコトトナリ其ノ命ヲ受ケ筆ヲ執ルニ当リ一言ノ序文ヲ求メラレタルモ浅学ノ人ニ過ギザルノミナラズ文章ノ拙ナキ自ラ知ルモ敢テ辞スルニ忍ビザルモノアリ

市ノ病院ハ昭和二十年ノ戦災ニ焼ケ残リタル市内ノ一部ニ仮設シ爾来十有余年ノ歳月ヲ経テ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ

市ノ病院ハ昭和二十年ノ戦災ニ焼ケ残リタル市内ノ一部ニ仮設シ爾来十有余年ノ歳月ヲ経テ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ

市ノ病院ハ昭和二十年ノ戦災ニ焼ケ残リタル市内ノ一部ニ仮設シ爾来十有余年ノ歳月ヲ経テ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ

市ノ病院ハ昭和二十年ノ戦災ニ焼ケ残リタル市内ノ一部ニ仮設シ爾来十有余年ノ歳月ヲ経テ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ市ノ人口ハ当時ノ三倍ニ達シ市ノ発展ハ目覚ヲ呈シ来リ

昭和三十年十二月吉日

清水市長　清水清

婦人會へ二百五十圓、三七會へ二百圓、靜中同窓會へ一百圓、快速自動車共濟會基金へ一百圓、清水町青年團へ一百圓、同女子青年團へ一百圓、同愛國婦人會へ一百圓、同國防婦人會へ一百圓、清見寺へ五十圓、鐵舟寺へ五十圓、修善寺奥院へ三十圓、等々で實に巨額なものである。

清水市に於ては市會の議を經て寄贈金を受領し、之を以て松原町に市立清水病院を建設して一般市民をして永く惠浴せしめ、深く其の遺德を景仰させる事になり、清水商工會議所に於ては會議所擴張建築の資に充て、清水市教育會では會員の大陸視察費の基金とし、忠愛國民學校では學校圖書館を新設する事になり、孰れも深く感謝して遺德敬仰の念を新にして居る。

年譜

明治十六年(癸未)　一歳

二月五日現清水市上清水の郷に生る、父山崎治郎七、母美禰(澤野仁右衛門二女)、幼名を通太郎と稱す。

明治十七年(甲申)　二歳

明治十八年(乙酉)　三歳

明治十九年(丙戌)　四歳

明治二十年(丁亥)　五歳

十月二十四日生母病歿、伯父澤野精一(庵原郡袖師村母生家)に養はる。

明治二十一年(戊子)　六歳

庵原郡袖師尋常小學校に入學。

明治二十二年(己丑)　七歳

○憲法發布。東海道線全通。

明治二十三年(庚寅)　八歳

○教育勅語渙發。金鵄勳章制定。第一回國會召集。

明治二十四年(辛卯)　九歳

○濃尾大地震。大津事件。府縣郡制實施。

明治二十五年(壬辰)　十歳

明治二十六年(癸巳)　十一歳

組合立巴高等小學校入學

○郡司大尉占守島に出發。福島中佐シベリアより歸る。

明治二十七年(甲午)　十二歳

○八月一日清國に宣戰布告。

明治二十八年(乙未)　十三歳

四月縣立靜岡中學校入學。

○四月日清講和成立。三國干涉遼東還附。

明治二十九年(丙申)　十四歳

特待生となる(爾來卒業迄同斷)。

明治三十年(丁酉)　十五歳

○三月始めて金本位制採用。

明治三十一年(戊戌)　十六歳

○六月始めて大隈、板垣の政黨內閣成立。

明治三十二年(己亥)　十七歳

明治三十三年(庚子)　十八歳

靜岡中學校卒業、東京高等商業學校入學。

○北清事變。九月立憲政友會成る。

明治三十四年(辛丑)　十九歳

明治三十五年(壬寅)　二十歳

○日英攻守同盟締結。

明治三十六年(癸卯)　二十一歳

○六月露國陸相、クロパトキン國情視察に來朝。

明治三十七年(甲辰)　二十二歲

東京高等商業學校專攻部入學。

○二月日露國交斷絕、十日宣戰布告。

明治三十八年(乙巳)　二十三歲

十二月鈴木昌子と婚姻鈴木與平(五代目)の養子となる。

○一月四日旅順開城。三月十日奉天大戰。

○五月二十七日日本海大海戰。九月日露講和條約成立。

明治三十九年(丙午)　二十四歲

六月東京高等商業學校專攻部卒業。

○四月凱旋大觀兵式。十一月滿鐵成立。

明治四十年(丁未)　二十五歲

明治四十一年(戊申)　二十六歲

三月、靜岡縣石炭商組合長に就任(爾來引續く)。

○十月十三日、人心の奢侈を戒められ戊申詔書渙發せらる。

明治四十二年(己酉)　二十七歲

○十月伊藤博文ハルビン驛頭に殺害され十一月國葬。

明治四十三年(庚戌)　二十八歲

五月十一日、嗣子一郎誕生。

○八月二十二日日韓合併條約成立、韓國を朝鮮と改稱。

明治四十四年(辛亥)　二十九歲

十月二日、次男要二誕生。

明治四十五年(壬子)　三十歲

○七月三十日、大正と改元。

大正二年(癸丑)　三十一歲

○桂太郎、德川慶喜兩公薨去。東北北海道大凶作。

大正三年(甲寅)　三十二歲

三月二十六日、三男清司誕生。

○七月歐洲戰亂勃發。八月獨逸に宣戰布告。十一月青島陷落。
○十二月東京驛落成。

大正四年(乙卯)　三十三歳

大正五年(丙辰)　三十四歳

一月、株式會社清水銀行監査役就任(大正六年七月迄在任)。

大正六年(丁巳)　三十五歳

二月二十六日養父鈴木與平長逝(五十五歳)。同日家督相續。
三月十九日襲名(六代目鈴木與平となる)。
五月、清水町會議員當選、七月、株式會社清水銀行取締役頭取就任(昭和七年四月駿州銀行に合併解散迄引續在職)。
○九月金貨金塊海外輸出禁止。

大正七年(戊午)　三十六歳

五月、鈴與倉庫株式會社取締役社長就任(爾來再選重任)。
○八月シベリア內亂勃發日米兩國浦鹽出兵。

○十一月歐洲戰亂休戰條約成立。

大正八年(己未)　三十七歳

四月靜岡稅務署所轄內營業稅調査委員當選。
九月、靜岡縣會議員當選。
○六月ヴエルサイユ講和條約成立。

大正九年(庚申)　三十八歳

○三月―五月露領ニコライエフスクにてパルチザンの爲邦人七百餘名虐殺さる。四月、沿海州守備のためシベリアへ出兵。

大正十年(辛酉)　三十九歳

五月、清水町會議員再選。七月、株式會社三十五銀行監査役就任(大正十五年一月迄在任)。十一月日本赤十字社有功章を授與せらる。
○二月全國町村長會成立。十一月原敬暗殺さる。
○ワシントン海軍軍縮會議開催。

大正十一年(壬戌)　四十歲

十二月、多年鹽販賣上に功勞あり專賣局長官より表彰。

○二月山縣有朋薨去。

大正十二年(癸亥)　四十一歲

五月十八日、四男辰衞誕生。

五月、株式會社天野回漕店監査役就任(爾後引續く)。

六月、靜岡稅務署所轄內營業稅調査委員再選。

十月、靜岡縣會議員再選。

○四月郡制廢止。九月一日關東大震災死者十數萬。

大正十三年(甲子)　四十二歲

三月、日本赤十字社靜岡支部評議員に推薦せらる。

三月、都市計畫靜岡地方委員會委員に任命さる。

四月、清水市敎育會長に就任(爾後引續き在職)。

五月、清水市會議員當選同議長就任(爾後滿期再選重任)。

六月、靜岡稅務署所轄內所得稅營業稅調査委員當選。

○二月十一日清水市制施行。

大正十四年(乙丑)　四十三歲

六月、帝國在鄕軍人會清水市聯合分會顧問就任。

六月、駿遠鹽業株式會社取締役社長就任(爾後再選重任)。

○三月東京放送局放送開始。四月商工省農林省分立。

○五月普通選擧法公布。

大正十五年(丙寅)　四十四歲

一月、株式會社三十五銀行取締役就任(昭和十二年迄)。

四月、株式會社清水木材倉庫取締役就任。

十月、靜岡稅務署所轄內所得稅調査委員當選、同會長就任。

○七月郡役所廢止。七月一日全國に靑年訓練所設置。

○十二月二十五日、昭和と改元。

昭和二年(丁卯)　四十五歲

三月、清水運送株式會社取締役社長就任(爾後再選重任)。
十月、靜岡縣會議員再選。
十月、都市計畫靜岡地方委員會委員任命。
十二月、株式會社清水木材倉庫取締役社長就任(爾後引續)。
十二月、清水倉庫株式會社監査役就任。
○六月、三國(日、英、米)軍縮會議。

昭和三年(戊辰)　四十六歳。

六月、靜岡運輸事務所管内鐵道省指定店會評議員被推薦。
十一月、稅務行政の發達上に功績あるを以て名古屋稅務監督局長より表彰を受く。

昭和四年(己巳)　四十七歳

三月、清水警察署管内自動車營業組合長就任。
十二月、清水市社會事業協會顧問就任。
十二月、清水食品株式會社取締役社長就任(爾後引續)。
十二月、清水倉庫株式會社取締役就任(爾後引續)。

昭和五年(庚午)　四十八歳

四月、清水瓦斯株式會社取締役就任(爾後引續)。
五月二十九日、今上陛下靜岡縣御巡幸中靜岡行在所(御用邸)に於て御陪食仰附られ御下問を賜ふ。
八月、清水商工會議所議員當選會頭に就任(爾後引續)。
十一月、靜岡縣會議長就任。
○ロンドン軍縮會議日英米三國協定成立。
○今上陛下、靜岡縣御巡幸自五月二十八日至六月三日。清水市へ行幸五月二十九日。

昭和六年(辛未)　四十九歳。

一月、清水市材木商組合顧問となる。
六月、靜岡稅務署所轄内相續稅審査委員に任命さる。
十二月、靜岡電氣鐵道株式會社取締役就任。

○九月十八日滿洲事變勃發。

昭和七年(壬申)　五十歳

四月、株式會社駿州銀行取締役就任。

五月、日本鮪類罐詰業水産組合長就任。

七月二十日、歐米視察出港、同年十二月十四日歸清。

○一月上海事變突發。三月滿洲國政府建國宣言。

昭和八年(癸酉)　五十一歳

八月、靜岡縣國防協會參與となる。

十月、日本鮪罐詰共同販賣株式會社取締役社長就任。

十一月、地方産業開發功勞者として日本産業協會總裁伏見宮殿下より表彰を拜受。

○三月、國際聯盟離脱。

昭和九年(甲戌)　五十二歳

二月、商工並に自治功勞者として靜岡縣知事より表彰を受く。

二月六日、横濱出帆米國に出張、鮪罐詰輸出數量協定をなし同年七月十一日歸朝。

九月、財團法人靜岡縣聯合保護會評議員に推薦せらる。

九月、清水市電動力使用組合長就任。

十月、海軍協會靜岡縣支部清水市副委員長となる。

十一月、南洋水産株式會社取締役就任。

十二月、東海蜜柑罐詰工業組合理事長就任。

昭和十年(乙亥)　五十三歳

三月、靜清貿易株式會社取締役就任。

六月、株式會社トモエ商會取締役就任。

八月、旭海産興業株式會社取締役就任。

十一月、名古屋鐵道局交通協議會委員を委囑さる。

○三月北鐵讓渡成立。

昭和十一年(丙子)　五十四歳

一月、茨城水産工業株式會社取締役就任。
二月、福羽撚糸株式會社取締役就任。
二月、靜岡瓦斯株式會社取締役就任。
三月、財團法人日本罐詰協會常務理事就任。
三月、株式會社鈴與商店取締役社長就任。
四月、靜岡縣倉庫業協會副會長に就任。
四月、沼津食品株式會社取締役就任。
四月、丸東罐詰株式會社取締役就任。
六月、南光化學工業株式會社取締役就任。
七月、太洋石油株式會社取締役社長就任。
八月、靜岡合板株式會社取締役就任。
八月、東洋製乳株式會社取締役就任。
十、二月、靜岡縣東亞輸出組合理事長就任。

昭和十二年(丁丑)　五十五歳

二月、株式會社清水合板製作所取締役社長就任。
三月、株式會社靜岡三十五銀行取締役就任。
四月、中部產業團體聯合會委員となる。
四月、市會議長在職十三年の功勞に依り全國市會議長會より表彰を受く。
四月、日本通運株式會社加盟店會評議員就任。
七月、東洋機械製造株式會社取締役社長就任。
八月、清水海運株式會社監査役就任。
九月、清水小型タクシー株式會社取締役社長就任。
九月、清水市軍事後援維持會副會長就任。
十二月、紀元二千六百年奉祝會評議員を委囑さる。
○七月七日支那事變勃發、十二月十三日南京攻略。

昭和十三年(戊寅)　五十六歳

一月、株式會社快運自動車商會取締役社長就任。

三月、日本食糧協會理事就任。
三月、靜岡縣石油消費規正委員會委員就任。
四月、清水市防諜聯盟理事就任。
四月、靜岡保護觀察所囑託保護司に就任。
四月、財團法人南洋水產協會評議員就任。
五月、清水市各驛興津運送業組合長就任。
六月、第二區小運送業自治會々長就任。
六月、沼津食品株式會社取締役社長就任。
七月、靜岡縣實業教育振興會評議員就任。
十一月、日本蜜柑罐詰工業組合聯合會理事長就任。
○十月廣東攻略。十月二十七日武漢三鎭攻略。

昭和十四年(己卯)　五十七歳

一月、長子の婚禮式を擧ぐ。
二月、聖路加病院入院、二月大手術、七月歸邸。

二月、清水警察署經濟警察協議會協議員就任。
三月、日本輕金屬株式會社監査役就任。
四月、靜岡司法保護常務委員會參與就任。
四月、靜岡石炭統制組合理事長就任。
五月、清水精機株式會社取締役社長就任。
五月、清水市銃後奉公會副會長に委囑さる。
六月、靜岡縣罐詰工業組合理事長就任。
七月、靜岡地方裁判所人事調停委員に任命さる。
八月、多年縣政に功勞あるに依り靜岡縣知事より表彰さる。
九月、貴族院議員多額納稅者議員に當選同月二十九日貴族院議員に勅任せらる。
九月、日本水產罐詰販賣株式會社監査役就任。
十月、職業協會靜岡縣支會副會長に委囑さる。
十月、病氣再發の爲東京聖路加病院に入院す。

十二月、清華海運株式會社取締役社長就任。
十二月、靜岡輸出振興株式會社取締役就任。
十二月、靜岡縣思想對策研究會顧問就任。

昭和十五年(庚辰)　五十八歳

一月、靜岡縣石油販賣株式會社相談役就任。
二月、日本農產罐詰共販株式會社取締役就任。
二月、多年軍事に功勞あり陸軍大臣より表彰を受く。
五月二日午前三時五十分聖路加病院に於て永眠。
五月二日、叙從六位、特旨を以て位記を追賜せらる。
○紀元二千六百年。三月三十日中華民國國民政府成立。

鈴木與平氏傳　終

昭和十六年十二月二十八日印刷
昭和十七年一月三日發行

非賣品

編纂兼發行者　靜岡縣清水市役所內　清水市教育會　代表者　下里龍夫
印刷者　東京市小石川區諏訪町五六　奈良直一
印刷所　東京市小石川區諏訪町五六　株式會社　常磐印刷所
發行所　靜岡縣清水市役內所　清水市教育會

不許複製

922
136

終